

## 近代における日本、中国の文人・作家の自殺

著者	王 述坤
会議概要（会議名，開催地，会期，主催者等）	会議名：日文研フォーラム，開催地：アーバネックス御池ビル東館，会期：2004年6月4日，主催者：国際日本文化研究センター
ページ	1-71
発行年	2004-10-15
その他の言語のタイトル	A comparison of suicide among modern Japanese and Chinese writers
シリーズ	日文研フォーラム ； 170
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00005663">http://doi.org/10.15055/00005663</a>

第170回 日文研フォーラム



# 近代における 日本、中国の文人・作家の自殺

A Comparison of Suicide among Modern Japanese and Chinese Writers



王 述坤  
WANG Shukun

---

国際日本文化研究センター





日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 山折 哲雄



● テーマ ●

# 近代における 日本、中国の文人・作家の自殺

A Comparison of Suicide among Modern Japanese and Chinese Writers

● 発表者 ●

王 述坤  
WANG Shukun

東南大学外国語学部教授

Professor, Southeast University

日文研外国人研究員

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies



2004年6月8日 (火)

## 発表者紹介

---

王 述坤

WANG Shukun

中国・東南大学外国語学部教授

Professor, Southeast University, Department of Foreign Languages

国際日本文化研究センター外国人研究員

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

## 略歴

- 1962年 7 月 南京師範大学中国語学部中退
- 1966年 7 月 北京外国語学院日本語科本科卒
- 1992年10月 遼寧大学外語系副主任 教授
- 1996年10月 東南大学外語系教授
- 2003年 9 月 日文研外国人研究員就任（2004年 8 月まで）

## 著書・論文等

- 「井伏鱒二の『遙拝隊長』を評す」『日本研究』 1986. 2 期
- 「田宮虎彦の『銀心中』を評す」『日語学習』 1989. 2 期
- 『日本近現代文学選読』遼寧人民出版社 1999
- 「野間宏論」『東南大学学報』（哲学社会科学版） 2001
- 「談訳文中の“気”」（上）（下）『日語知識』大連 2001
- 「談訳訳遣詞造句中の提煉—翻訳谷崎文学点滴回眸」『日語知識』 2001

## はじめに

自殺は人類文明とともに発生し、今に至るまで自殺の存在しない社会はまだないと『エンサイクロペディア・ブリタニカ』は記述する。人類学では、原始人の群に既に自殺があり、少なくとも四千年も前の自殺の遺書が、近年エジプトで発見された、という確かな証拠を提出している<sup>1</sup>。

人類の歴史全体を通じて見れば、近代以来、文人もしくは作家と呼ばれるような人たちの自殺はもつとも多いように思われる。文人・作家の自殺は、ある時代における文人・作家の社会的環境が大きく変化し、彼らの心のバランスが崩れたことを反映しているとみられる。ところで自殺とはいったいどういうものか。なぜ文人・作家には自殺者が多く出るのか？そして、なぜ近代に入ってから、日本人の文人・作家には目立つて多くの自殺者を出し、自殺の伝統のなかった中国でも文人・作家が、近代に入ってから、自殺者は増えたばかりか、プロレタリア文化大革命中、夥しく自殺した者が出たのか？本論では、自殺の社会的要素を主な視点として、近代に起きた日本と中国の文人・作家の自殺について比較的議論を展開してみたいと思う。

我々は、孤立的に存在しているのではなくて、社会という関係体系のなかに共存している。個人の生活は、個人の自由意志によって支配されているかのように見えているが、実際、いろいろな思想的に行動的に社会というものに関連し合い、互いに制約されている。文人・作家の自殺も大抵、家庭という社会を構成する細胞から、文壇という小社会、国内社会乃至国際社会にいたるまで、いろいろの事柄に深く関わっているから、その自殺を研究するには、何よりもまずそれに着眼しなくてはだめだと思う。この意味から言えば、フラン

スの社会学者デュルケムは、誰よりも先に社会的要素に着眼した『自殺論』の重大な意義は否定できない。

人間を徹底的に『社会的存在』として考察していくこの社会学者（デュルケム）の眼は、人間の生というものがいかに集団生活によって影響され、左右されるものであるかをするどく見てとっている。いかえれば、自殺は、この行為にはしる人間の生きてきた集団生活にかかわる要因をぬきにしては、じゅうぶんに説明されえないということなのだ。

宮島喬氏がいろいろ説明し補足した通り、デュルケムの学説は当時欧州諸社会の自殺を通じてその社会の病態にメスを入れたばかりか、社会的要因はいかに重要なかを強調し、そして社会学的に自殺を分類したことも、後の研究者に重要な手がかりを提供した画期的な貢献と言わざるを得ない。

ところが、同じく宮島喬氏が指摘したように、今日の目から見ればデュルケム学説には、いくつか問題点があることも否定できない。たとえば、「社会的要因」と「非社会的要因」という分け方の厳密でないことや、根拠にした官庁統計のデータは確実に権威のあるものとは限らないことや経済的貧困・病苦を軽視したことなどが挙げられる。

そのほか、筆者の思うところでは、社会には統合力があると言われているが、物理学の力学原理に基づいて、その反動も必ずあり、統合力は強ければ強いほど、その反動も強くなるのではないか。たとえば、中国のプロ文革という特定の時期中、社会的統合力は強くないとは言えないのに、なぜ夥しく文人の自殺が出たのか。因みにデュルケムの研究は、十九世紀のヨーロッパ向けで、東洋人の自殺のケースには必ずしもぴっ

たり当てはまるとは限らない。それにデュルケムは、自殺する人間を受動的なものとして固定的に扱っているように思われ、自殺者の主観的能動性を見逃したのではないかと思われる。ここではまず、自殺の定義、種類や自殺率などから検討して、文人・作家の自殺の多発の原因を探るとともに、近代以来とくに有名な日本と中国の文人・作家の自殺を例にして、比べながら、法則らしいものを探ってみたいと思うのである。

## 一 自殺の考察

### (一) 自殺の定義

自殺とは何か？自殺という現象を定義づけることは難しいことで、米国自殺学会会長、著名な自殺研究学者シュナイドマン (E. S. Shneidman) が、『Definition of Suicide』(自殺の定義) という一冊の本を出版したぐらいである。

そこで自殺の定義として次のようにのべることができよう。死が、本人自身によってなされた積極的、消極的な行為から直接、間接に生じる結果であり、しかも、本人がその結果の生じうることを予知していた場合を、すべて自殺と名づける。<sup>3)</sup>

右は近代における自殺研究の先駆者デュルケムの定義づけであるが、これは自殺の定義の代表的なもので、



その後の研究者たちから、またいろいろ修正されたり、細かくしたりされていった。

なお、自殺の定義を研究していた前記のアメリカのシュナイドマンの定義は次のように自殺者の必要の角度から自殺の性格を社会の「病」と定義している――

自殺とは「人間が自ら引き起こした、そして自ら意図し、生命を終わらせる行為」であり、「自殺とは意識的に自らがもたらした死の行為であり、ある種の問題にたいして最善の解決策であるとみなす必要に迫られた人にとっての多次元的な病として最もよく理解される」。

前記諸氏の定義の言葉遣いこそまちまちであるが、まとめて通俗に言えば、すなわち、自殺とは、死にたいと思っている、心理的に成熟した人間が、死ぬことを予知しながら、自分の意志で自分の生命を終わらせる行動を取る、ということかと思う。「自らの意図」と「結果予測性」が大抵、定義中の二つの欠くべからざる要素である。

## (二) 自殺のメカニズムと法則

ある人間がなぜ自殺しなければならぬのか？普通は生理、病理、心理、社会などの面からその原因が探られる。

病理学的に言うとき、自殺の思いつきは憂鬱感と大いに関係があるが、これは、医学、生物化学、生理学、病理学の分野で、学者たちの重要な研究課題である。普通精神医学と心理学において、憂鬱は反応性と臨床性とがあり、前者は落第や失恋や事業倒産などによるはつきりした憂鬱感をさす。このタイプは、その憂鬱の源を無くしさえすれば、時間が必要であるものの、回復する可能性は極めて大きい。それに対し、後者の

憂鬱は、はっきりした原因もないのに、理解しがたい絶望感に陥ってしまったて、實際一種の原因不明の精神病であると言う。大抵、精神医学の学者の研究は比較的にこの方面に傾いている。

心理学的に言えば、

フロイトは攻撃性を、人間の持っている破壊本能が姿を現したものだとかんがえた。殺人にも自殺にもこの傾向が見られるのであるが、殺人の場合にはこれが外に向けられ、自殺の場合には、これが自身に向けられる……人間には生命をつくり、子孫を増やしていこうとする傾向と、その反対に生命を分解して無機物にしようとする傾向がある。前者が『生の本能 Eros』であり、後者は『死の本能 Thanatos』である。

自殺と社会との関係を社会学的にデュルケムが次の法則をまとめている。

自殺は宗教社会の統合の強さに反比例して増減する。

自殺は家族社会の統合の強さに反比例して増減する。

自殺は政治社会の統合の強さに反比例して増減する。

デュルケムの説によれば、すなわち、社会関係の組織がよく統合され、高度の社会的集結のあるところでは、人々は自分の属する社会の一成員であることを強く自覚して、心理的孤独や寂しさから抜け出すことが

でき、これが自殺への志向を思い止まらせる強力な要因となるという。逆に社会的集結力の低い社会では、文化的価値は普遍性を失って個人はアトム化され、相対化され、孤立されて、成員の経済や健康や気候などの条件とは関係なく、人々を自殺に追い込む原動力となるわけである。言い換えれば、社会的自由度の多い社会では、むしろ自殺が多発するというのである。

なお、「非社会的原因」と「社会的原因」の比重につき、デュルケムは

説明しなければならないこの現象（自殺）は、きわめて非社会的原因に起因するか、そうでなければ、まさに社会的原因に起因するかのどちらかでなければならぬ。そこでまず、非社会的原因のもたらす影響がどのようなものであるかをたずね、それが無に等しいか、もしくはごく限られた影響でしかないことをあきらかにする。<sup>8</sup>

と、非社会的原因より、社会的原因に主に着眼している。

心理文化学理論の創始者アメリカのファーマーの理論をまとめれば、集団における自殺頻度は、その集団が含む高度に傷つきやすい個人の数、及びその集団に特徴的な社会的欠乏の規模に正比例する。この法則を一般公式にすると次のようである。

$$S = F(VD)$$

ただし――

Sは自殺の確率 (the probability of suicide)

Fは関数 (function)

Vは人格の脆弱性 (vulnerability in the personality)

Dはある種の特定な欠乏 (degree of certain deprivations)<sup>9</sup>

自殺の確率は、人格の脆さとある種の特定な欠乏との関係によつて決定されるという。すなわち社会学者としてのデュルケムがこのうちのDだけを強調し、精神分析理論がVだけを考慮していたのに対して、フーバーの公式では自殺の「社会的」要因と「個人的」要因がともに考慮されているわけである。自殺の仕組みの分析上、より全面的だと思われる。

一九六〇年以来、欧米では、自殺行動と生化学的指標の関係について焦点が当てられ始めた。日本の自殺研究学者高橋祥友氏のまとめによれば、

a 「死後脳を対象にした初期の研究」、b 「自殺企図者の脳脊髄液の研究」、c 「死後脳の受容体結合の研究」、d 「内分泌学研究」などがあるが、「現段階では生物学的な研究はあくまでも研究の域を出ておらず、いまだ日常臨床に活用するにはほど遠い」<sup>10</sup>。

と、生物学的研究はまだまだ結論に達しない状況であることを示している。

ところが、自殺について、在来のデュルケム理論と全く視角の違ったフランスのジャン・バツシュレール

理論が現れ、自殺の是非問題に関わってきたので注目を集めている。バッシュレールは、『自殺者』という著作の中で、デュルケム理論に対抗する研究を発表した。彼の説によれば

自殺は究極的には個人の心理のレベルにおいて理解されねばならず、デュルケム理論のように、個人と社会との結合度から説明できるものではないという。また、すべての自殺行為を簡単に精神異常と結びつけてしまつては、自殺を主観的世界のなかで、とらえることは不可能になる。氏はドイツの社会学者マックス・ウェーバーの『社会行動論』を重要視して、自殺者の社会的境遇、立場または他人との關係を理解することを重んじている。自殺原因究明の場合、『この人は長い間連れ添つてきた最愛の妻に先に死なれたために意気消沈して自殺をした』という第三者からの純客観的釈明よりも、『この人は死別した最愛の妻とあの世で再会するために自殺をした』という自殺者の主観的立場を尊重する理解が必要と主張している。<sup>11</sup>

このバッシュレールの解釈は、自殺者にたいする純客観的デュルケム理論の第三者の解釈より、もっと主観的に自殺者の意志にアプローチした理解だと言われている。意味深いことには、こうすると自殺という行為は自殺本人にとって、当たり前の主観的理由が作られ、そして、その悩みにたいする最も積極的な決断行為ということになる。結論として、この理論は、自殺行為をも、人生における対応の一つの型として考え、自殺に対する個人の権利を肯定し、精神障害とは別な次元の積極的な人間の社会行動と見なしている。この理論は、倫理上の諸問題に関わり、かつ自殺の是非問題にも関わるので、フランスのインテリの中で大変な

反響を呼んだが、精神科の医者からは大きな反感と敵意を買ったのは云々するまでもない。日本人の自殺事情を、バツシュレールの説明に当て嵌めたら、反社会的な三島や川端などの自殺も、合理的なもの、同情すべきものだと言えそうであるから、このすべての自殺を肯定する理論は明らかに偏った一面があると思われるのである。

筆者は、デュルケム理論よりアメリカのフアーバー理論とバツシュレールの解釈に強く興味があるが、上記欧米人の理論は、東アジアにおける日本と中国の文人・作家の自殺を旨く説明できず、別にその法則を掘り出さなくてはならないと思う。

### (三) 自殺の種類

デュルケム理論によれば、自殺の社会的分類は次の通りである。

#### 社会的原因と社会的タイプ

- 1 自己本位的自殺
- 2 集団本位的自殺
- 3 アノミー的自殺<sup>12</sup>

宮島喬氏も、デュルケム理論に基づいて、自殺の分類を次のようにまとめた。

I 自己本位的自殺 (suicide egoiste)。社会の統合や連帯が弱まり、個人が集団生活から切り離されて孤立する結果として生じる自殺。

II 集団本位的自殺 (suicide altruiste)。反対に社会が強い統合度と權威をもっていて、個人に死を強制したり、奨励したりすることによって生じる自殺。また、個人を超えたなんらかの集合的利益や信仰上の大義のために一身を犠牲にする行為もここにふくまれる。

III アノミー的自殺 (suicide anonique)。社会の規範が弛緩したり、崩壊したりして、個人の欲求への適切なコントロールがはたらかなくなる結果、無際限の欲求にかりたてられる個人における幻滅、むなしさによる自殺。

IV 宿命的自殺 (suicide fataliste)。その反対に欲求にたいする抑圧的規制が強すぎるため、閉塞感、絶望感がつのって生じる自殺<sup>13</sup>。

社会的原因による自殺タイプとして、デュルケムは自己本位的自殺、すなわち、自己中心型（その特徴として、社会との結合度が比較的弱くて個人主義が強く、作家や独身者などに多発する）、集団中心型（その特徴として、集団との結合度が強く、自己より集団を重んじて軍人や警察など国民意識の強い群れに多発する）、アノミー型（社会的規範のないタイプ、その特徴として、社会の激変期や、いきなり到来した好況や不況などの動乱時期などに多発したり、芸能人や倒産者や失業者や定年後の老人や配偶者の喪失者などに多発したりする）と分類している。

また、デュルケムの分類した三種類を、それぞれ、自己的自殺、愛他的自殺と虚無的自殺という別の三つ

の名称に解釈する学者もいる。

(四) 自殺率の考察

自殺死亡率(人口十萬対)の国際比較表は次の通りである。

	日本	米 国	英 国	フ ラ ンス	ド イ ツ	ハンガリー	イ タ リ ア	オーストリア	フィンランド
総数	98	94	95	95	95	95	93	95	95
男性	36.5	19.8	11.7	31.5	23.2	50.6	12.7	34.2	43.4
女性	14.7	4.5	3.2	10.7	8.7	16.7	4.0	11.0	11.8

(筆者注：周知の事情で中国のデータは含まれていない)<sup>14</sup>

右の表の中では、比較する年度が多少異なるが、日本は欧米と比較すると、自殺死亡率はほぼ中間から上位に位置し、G7(先進七カ国)の中ではきわめて高い値を示している。

理由は後述するが、自殺者のうち、文人・作家の占める比率は多い。デュルケムによれば、十九世紀に行われた自殺性向を職業別に見る調査において芸術家、学者を含む創造的職業に従事する人々は首位の軍人に続く自殺率を示しているという。

フランスでは、一八二六年から八〇年まで自殺の首位を占めていたのはこの自由業であった。すなわ



ち、この職業集団の人びと百万あたりの自殺は五五〇であつた……イタリヤでは……一八六八年―七六  
年の期間では、この同じ職業従事者百万あたりは四八二・六であり……バイエルン（筆者注：バヴァリ  
アのこと）では……芸術家、文学者、記者の四一六……<sup>15</sup>

日本の文人・作家の場合、専門的な統計数字が見つからないが、第一学習社出版の二〇〇二年度の『新  
訂総合国語便覧』（稲賀敬二等監修）に載っている詩人、俳人、評論家を含む近現代文人・作家二六〇名の  
うち、北村透谷、有島武郎、芥川龍之介、牧野信一、太宰治、原民喜、火野葦平、三島由紀夫、川端康成、  
田宮虎彦の十名の有名な作家が自殺した。それで計算すれば、文人・作家の自殺率は、四％というわけであ  
る。また、『近代作家研究事典』<sup>16</sup>に載せられた一四四名の作家のうち、芥川龍之介、有島武郎、川端康成、  
北村透谷、久保栄、太宰治、火野葦平、牧野信一、三島由紀夫という九名の自殺者が出た。これで計算する  
と、作家の自殺率は、低く見積もっても六％になるわけである。

けれども、一八九九年から一九八四年の日本男子の平均自殺率は、〇・二三二％に過ぎなかった。<sup>17</sup>すなわ  
ち、十万人の日本男子に、二三・二人しか自殺者が出てこないのに、四％の自殺率で計算するにしても、十  
万人の文人作家には、四千人以上も自殺者が出てくることになる！すなわち、文人・作家の自殺率は、少な  
くとも近代日本の男子の平均自殺率の一七二倍以上である！

中国の自殺率はどうであろうか。色々の原因で完全なデータが見つからないが、張朝陽氏の『人類自殺史』  
の中の完全でないデータを引用しよう。

わが国（中国）は、なお全国的自殺率のデータに欠けている。各省市のばらばらの報告に基づいて、次のように紹介する。

自殺率：中国の自殺率は、一七・七／十万人（二九八九）、毎年自殺による死亡人数は、およそ一九〇二二万人（何兆雄、一九九六）である。<sup>18</sup>

なお、張朝陽氏によれば、

作家を例にして言えば、楚の屈原から五四運動前まで、作家の自殺は合わせても三〇人を越えず、平均して百年ごとに一人という割合である。それ以降、特にプロ文革期間中、作家の自殺は激しく増え、その人数はこれまでの数倍を超えてしまった。<sup>19</sup>

のである。したがって、中国人の自殺者の中に作家の占める比例は、かなり低いことが分る。

文人・作家の自殺は上記の社会学的分析によれば、第一種類の自我中心型に属するもので、個人主義や自由主義の発達した欧米に多発する筈であって、日本人の自殺は大抵集団中心型に属するとされているというのに、なぜ近代に入ってから「集団本位自殺」でない自殺の作家が続出するのであるか？なぜ中国の文人・作家の自殺は少ないか？ただし、自殺の伝統がなかった中国の文人作家の自殺がプロ文革中なぜ夥しく出たのか。デュルケムの自殺の法則に相応しくないこれらの社会現象は、特殊な研究課題と言わざるを得ない。全体的に言えば、日本と中国の文人・作家の自殺は、ある程度、デュルケムと宮島喬氏のまとめた法則に

適うこともあるが、両氏ともつばら文人作家の自殺を論じたものはなかったのである。事実上、日、中の文人・作家の自殺は、デュルケム理論に当てはまらないこともある。たとえば、北村透谷、藤村操の自殺も、川端康成、三島由紀夫の自殺も、密接に社会的要因に関わるが、実はそれは同じ類いのものではない。中国のプロ文革中自殺した作家老舍や文学者傅雷や文人作家鄧拓なども、デュルケム理論では説明できない。なお、宮島喬氏の指摘したとおり、「自殺論」の著者は、自殺の『社会的』要因をいろいろ挙げるに当たって貧困、経済的危機（失業、破産など）、病苦といった要因にはほとんど注意を払っていない<sup>20</sup>ので、川上眉山や牧野信一や中国の詩人朱湘などの自殺も、デュルケム理論から根拠が見出されないのである。

本論では、デュルケムと宮島喬氏の研究の補足というつもりで、両国のそれぞれ代表的な十人の有名な文人・作家（学生であった藤村操と陳天華の場合、自殺してから有名になったものであるのに対し、後の九人はもともと有名であったが、自殺してからなおいっそう有名になったものである）に對し、後の九人が、その自殺は影響が大きかったから、文人・作家の中に一応入れておくことにした）の自殺を簡単にまとめて、さらに議論を展開したいと思う。

## 二 近代における自殺した日本人の文人・作家概観

明治以来影響力のある自殺した文人・作家を次の表にまとめてみた。

〔自殺の原因とされた主な事情〕の記載は、『自殺の文学史』によるものには※印を付し、あとは資料による筆者の判断とし、資料の見付からないものはとりあえず「不明」と記した）

年月日	自殺者	自殺の手段	自殺の理由とされた主な事情
明治時代			
一八七二・二・二七	小説家 一宮猪吉郎	自殺	不明
一八九四・五・一六	評論家 北村透谷	縊死	思想の苦悶など※
一八九五・四・一二	小説家 藤野古白	拳銃	うつ病※
一八九八・九・三	小説家 中西梅花	自殺	不遇に発狂
一九〇三・五・二二	一高生 藤村操	滝に身投げ	思想の苦悶、哲学の思考
一九〇八・六・一五	小説家 川上眉山	剃刀	創作危機に貧困
大正時代			
一九一三・一一・五	小説家 山本銅山	自殺	発狂
一九二一・一〇・二八	作家 野村隈畔	入水自殺	愛人と心中
一九二二・一一・一〇	評論家 竹内仁	婚約者の親を刺殺後縊死	不明
一九二三・六・九	小説家 有島武郎	縊死	苦悶で愛人と心中
昭和時代			
一九二七・七・二四	小説家 芥川龍之介	睡眠薬	社会への不安など
一九三〇・三・一〇	詩人 金子みすず	睡眠薬	離縁で親権獲得上社会への不平など
五・一九	詩人 生田春月	船から身投げ	神経衰弱に妻、愛人との関係の悩みなど
一九三二・一二・一二	小説家 中村進治郎	ガス自殺（未遂）	心中（高輪芳子死去）
一九三六・三・二四	小説家 牧野信一	縊死	創作危機苦悶に貧困など
一九四五・八・一九	作家 蓮田善明	ピストルで連隊長を射殺してから自殺	軍国主義思想中毒の深さ
一一・三一	小説家 生田葵山	入水	一家死絶など？

一九四八・六・一三	小説家 太宰治	入水	幻滅、罪悪感など
一九四九・六	作家 長沢延子	自殺	戦後の虚無的な現実
一一・三	作家 田中英光	服毒割腕	幻滅に模倣
一九五〇・四・一五	評論家 木村莊太	縊死	出身、父親の放蕩など？
一九五一・三・一三	作家 原民喜	鉄道自殺	核戦争への恐怖と不満
一九五二・一二・三一	作家 久坂葉子 (川崎澄子)	鉄道自殺	家庭落ちぶれと失恋など
一九五三・一二・二二	劇作家 加藤道夫	縊死	戦争の残した翳など
一九五六・一・一	評論家 服部達	服薬凍死	創作危機、貧困に恋愛など※
一一	劇作家 寺島信男	服毒	不明
一九五八・三・一五	小説家 久保栄	縊死	神経性疾患※社会への不満
一九五九・六・二二	小説家 村雨退二郎	服毒	不明
一九六〇・一・二四	小説家 火野葦平	睡眠薬	或る「不安」など
一九六九・六・二四	『二十歳の原点』 作者 高野悦子	鉄道自殺	「連合赤軍」、人生への悩み
一九七〇・一一・二五	作家 三島由紀夫	切腹	「芸術的自殺」※
一九七二・四・一六	作家 川端康成	ガス自殺	不眠症、うつ、三島自殺※
一九七三・八・一八	小説家 小林美代子	睡眠薬	病苦
一九七五・三・二九	評論家 村上一郎	動脈切り	神経症に久保、三島の自殺の影響
七・一七	『僕は十二歳』 作者 岡真史	ビルから身投げ	心の悩み
一九七六・三	中国文学者 村上知行	自殺	不明

一九七九・四・二二	作家	江口榛一	縊死	病苦に生活難？
一九八一・四	劇作家	金具省三	縊死	うつ病
六	放送作家	杉江慧子	白骨発見	不明
一九八二・七・一七	作家	江上美好	縊死	不明
一九八六・二・一七	作家	鈴木いづみ	縊死	不明
一九八八・四・九	作家	田宮虎彦	マンションから身投げ	年齢と病苦？
六・一六	作家	石沢英太郎	縊死	老齡問題？
平成時代				
一九九〇・一〇・一〇	作家	佐藤泰志	縊死	何回も芥川賞落選など？
一九九三・一二・一三	作家	藤田五郎	ビニール袋窒息死	不明
一九九九・七・二一	作家	江藤淳	割腕	病苦
二〇〇一・二・二一	作家	加堂秀三	縊死	不明
六・一七	作家	青山正明	縊死	麻薬からうつ病
二〇〇二・五・二九	作家	矢川澄子	縊死	離婚、親しい者に死なれて寂しくなるなど？
二〇〇四・四・一一	作家	鷺沢萌	縊死	不明

日本の古代では、少数の男性が政治的失敗のため自殺するほか、女性の多くは愛情のために自殺する。中世では、愛情の心中よりも、武士の切腹が多かったが、そのうち「殉死」というのは、実際は真の自己意志による自殺ではなくて、強いられる死である。その自殺は、したくてもしたくなくても、本心からの死ではない。『興津弥五右衛門の遺書』の中で鴈外は、一片の恩義が人を死なすことを美しく描き、封建道徳を肯

定しているが、また一方、『阿部一族』の中で弥一右衛門の末路を通じて、殉死を否定した。文学作品中の人物であるにもかかわらず、封建的因襲の野蛮な慣わしによって、生きようとしても死のうとしてもできないという哀れな境遇がありありと描かれている。それに対して、文人・作家の自殺は少なかった。

一方、近世では、戯作家たちは、大衆の娯楽を旨として、それに工夫を凝らしていたが、あくまで自己追及告白により身を苛む近代作家と根本的に違っていて、近世作家の自殺はまず、聞いたことがない。

日本が明治維新以来取った「富国強兵」政策は、対外侵略を狙って庶民たちの苦難を全然顧みなかった。そういう「近代化」に疑問符をつけ、その答案を求められずに悩んだ挙句、理想主義を旨とした北村透谷は、あきらめて自殺した。日露戦争の直前、哲学青年の藤村操は、立身出世主義に背を向け、新しい人生価値を求められずに人生は「不可解」という「巖頭之感」を残して煩悶自殺した。明治維新以来、知識人は、自我に目覚めたからこそ、自殺を以って社会に反抗したのである。自己で自己の運命を握れること。この意義からいえば、明治時代に自殺した透谷、藤村と川上の自殺には、積極的な意義も全然ないとは言えないと思う。透谷も藤村も、社会の歪みによって自殺したと言えそうであるとともに、社会の進歩と政治的空氣の緩やかさを示したとも言える。川上眉山の自殺には、そこに文壇という小社会の原因も加わるが、直接の原因は生活難であって、これは正に社会の歪みによるもの以外の何物でもない。

大正時代に起こった民主主義を求めるといって、大正デモクラシーの動きが高まっていた。様々な運動や文化が花開き、新たな言論活動も始まった。大正政変で幕が開き、第一次護憲運動（一九一二〜一九一三年）によって、桂内閣を退陣させ、普通選挙運動が高まる。米騒動（一九一八年）、第二次護憲運動（一九二四年）もおこった。世界大戦を繰り返したくない願いが、新しい時代を要請したのである。が、社会主義対策とし

て普通選挙の実施で予想される無産政党の進出を阻むために制定する治安維持法も成立する。「国体の変革」と「私有財産制度の否認」を目的として結社をつくることが禁じられた。

大正時代に、民主主義、大正教養主義の機運の中で、自殺した作家は確かに少なかった。唯一の自殺した影響力のある作家は、心中の仕方を取った白樺派の有島武郎である。実際は単なる心中ではなくて、「第四階級」(有島の言葉・プロレタリア階級のこと)の発展を予感して、自らが所属する階級の前途への絶望の上、社会道徳から追い詰められて、知識人の潔癖から経済的方法で解決しようとせず、愛情至上に逃げ場を見つけて、「生命の燃焼」という自殺をしたのである。表面的に取れば、確かに有島と秋子は心中だと取れそうであるが、深層の原因は本階級の前途への絶望が本当の原因だと思う。この意味から言えば、有島にしてみれば、生命を愛しないのでもなくて、むしろ並みの人よりも生命の価値を理解したかったのではないかと思うのである。

一九二六年から一九八九年にかけての長かった昭和時代であったが、昭和八年までにはや大正デモクラシーの余韻は消え、軍国主義が日本中、大手を振って歩き始めた時代であった。一九二七年金融恐慌の最中、未来のプロレタリア階級の社会を予見しながら、その運動に踏み切る勇気がなかった芥川は、神経衰弱も加わって自殺した。なお、軍部の台頭が明らかになった一九三六年、「二・二六事件」の九カ月後には牧野信一が、書けない悩みともあいまって悲観厭世で自殺した。恐慌、エロ・グロ・ナンセンスの時代は、ファシズム戦争の敗北を経て、戦後の焼け跡と生活窮乏の時期を迎えた。退廃・絶望のなかで、自分が地主の息子であることと、プロレタリア運動に共感していたことが大きな矛盾として脳裏に焼きつき、死だけが自分を救う唯一の手段と思った無頼派の太宰治は、何回も自殺し損なったのち、とうとう戦争未亡人の山崎富栄



と一緒に入水自殺することに成功した。太宰の自殺はある意味では、典型的な「恥の文化」「罪の文化」の犠牲者といえよう。その翌年に、同じく、毒藥、酒色に耽った田中英光も、その師匠に追隨して太宰の墓前で自殺した。また朝鮮戦争の最中、情勢が危うく核戦争になろうとする頃、自らの深刻な体験から核戦争に大反対の原民喜は、鉄道自殺を遂げた。

五十年代から六十年代、日本は民主化の道を歩み始め、一九五五―五七年の「神武景氣」と一九六〇―六一年の「岩戸景氣」を経て、六十年代中頃の「所得倍増」によって人々は生活難からようやく抜け出し、戦争への憎しみと平和の有難さを一旦舐めた日本の庶民は七〇年、戦争につながる「安保自動延長」反対闘争に立ち上がったが、そういう民主的ムードに不満を感じ、かつての「大日本帝国」の夢を見ようとした三島は同じ年、世論を驚かせる芝居を演じてから切腹自殺した。一九七二年、日本はますます「伝統美」を失ったと感じた川端は、ノーベル文学賞をもらった四年目に「輪廻転生」という甘美な夢を抱いてガス自殺した。

前記五十名の自殺した文人・作家の統計はもちろん、かなり不完全なものである。にもかかわらず、資料入手の難しさによる原因不明の十名のほかは、本当の精神的発狂のケース、すなわち生理、病理的原因のみによる自殺は、中西梅花と山本銅山の二名だけである。そして中西梅花の場合、恐らく不遇も自殺原因の一つであろう。なお、「うつ病」の原因のある者には、藤野古白、久保栄、村上一郎があるが、久保と村上の場合、どちらも単純なうつ病ではなく社会的原因もかかわっている。その他の自殺の決定的主な原因は、思想の苦悶、悲観厭世、社会への不安・不満、家庭の事情、恋愛失恋、病苦、そして老人問題など、すなわち全部が社会的要因に関わっている。これから見ても、自殺は、この行為に走る人間の生きてきた集団生活に関わる要因をぬきにしては、十分に説明できないのである。

### 三 近代における自殺した中国人の文人・作家概観

近代における自殺した中国人の文人・作家は次のようにまとめた。

氏名	生年	自殺年	自殺年齢	自殺の手段	自殺の原因とされてきた事柄
清国留学生 陳天華 <sup>22</sup>	一八七五	一九〇五	29	海に身投げ	抗議、人々を目覚めさせる
文学者 王以仁 <sup>23</sup>	一九〇二	一九二六	24	海に身投げ	社会への不満と失恋
文学者 王国維 <sup>24</sup>	一八七七	一九二七	50	湖に身投げ	新旧文化の烈しい衝突
詩人 朱湘 <sup>25</sup>	一九〇四	一九三八	34	長江に入水	生計に困る
文人 陳布雷 <sup>26</sup>	一八九〇	一九四八	58	睡眠薬	誤った時代に殉じた
文学理論家 周文	一九〇七	一九五二	45	不明	不明
女流散文家 楊剛	一九〇五	一九五七	52	不明	反右
社会学者 張宗穎	一九一七	一九五七	40	不明	反右
翻訳家 方書春（北大）	一九一六	一九五七	41	縊死	反右
文人 田羽翔	一九〇〇	一九五七	57	縊死	反右

散文家 楊朔 <sup>33</sup>	作家 周瘦鵬 <sup>32</sup>	史学者 翦伯贊	作家 馮大海	作家 羅広斌 <sup>31</sup>	文人 陳璉（陳布雷の娘）	作家 許政揚	作家 葉以群（上影副社長）	作家 陳笑雨	作家 鄧拓 <sup>30</sup>	作家 老舍 <sup>29</sup>	作家 孔厥 <sup>28</sup>	文学者 傅雷 <sup>27</sup>
一九一三	一八九四	一八九八	一九二七	一九二四	一九一九	一九二六	一九一一	一九一七	一九一二	一八九九	一九一六	一九〇八
一九六八	一九六八	一九六八	一九六七	一九六七	一九六七	一九六七	一九六六	一九六六	一九六六	一九六六	一九六六	一九六六
55	67	70	40	43	48	41	55	49	54	67	50	58
不明	井戸に身投げ	不明（夫婦）	川に身投げ	ビルから身投げ	ビルから身投げ	川に身投げ	ビルから身投げ	川に身投げ	縊死	湖に身投げ	不明	縊死
同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	同前	プロ文革

戯劇家 田漢 <sup>35</sup>	一八九八	一九六八	70	不明	同前
作家 張海默 <sup>36</sup>	一九二三	一九六八	45	不明	同前
作家 馮志 <sup>37</sup>	一九二三	一九六八	45	不明	同前
史学家 吳晗 <sup>34</sup>	一九〇九	一九六九	60	不明 (夫婦)	同前
文人 範長江	一九〇九	一九七〇	61	井戸に身投げ	同前
文人 顧而已	一九一五	一九七〇	55	縊死	同前
詩人 聞捷 <sup>38</sup>	一九二三	一九七一	48	ガス	同前
台湾作家 三毛 <sup>39</sup>	一九四三	一九九一	48	縊死	夫に死なれて厭世になった
ルポ名作家 徐遲 <sup>40</sup>	一九一四	一九九六	82	ビルから身投げ	転換期の心理危機と婚姻不満足など

中国でもはるか昔から自殺があつた。何千年も前に、氏族の首領共工が「怒りて首を不周の山に触して天柱折りて地維絶つ<sup>42</sup>」という記述があるが、これはおそらく中華民族の一番最初の自殺の記録であろう。ところが、中国には、「好死不如頼活着」(どんなに立派な死に方も、辛うじて生きていることに如かず)などの俗言があるように、よほどの場合でもない限り中国人は自殺することはないのである。

中国の文人・作家の場合、周知の事情で確実な資料は限定されているが、歴史上の特殊な時期以外、自殺者はかなり少ないようである。紀元前二七七年に楚の詩人屈原<sup>43</sup>は、楚懷王、楚襄王から信用してもらえず、免官の上、追放にまでなった。のち楚は秦に敗れ、気骨のある屈原は汨羅江に身投げして自殺した。

儒家と道家の思想の影響によって、これまで確かな統計数字がなかったにもかかわらず、五四運動まで中華民族の自殺率は低いものであった。五四運動によって、『孔家店を撃ち潰せ』以降、儒家思想が弱まって自殺者は増えた。作家を例にして言えば、楚の屈原から五四運動前まで、作家の自殺は合わせても三十人を越えず、平均して百年ごとに一人という割合である。これ以降、特にプロ文革新期間中、作家の自殺は夥しく増え、その人数はこれまでの数倍を超えてしまった。<sup>44</sup>

五四運動以前の自殺した文人・作家を挙げれば、屈原以降宋元の転換期に、文学者の謝枋得<sup>45</sup>は、何回も元の朝廷からの出仕の勧めを断り、二十数日間絶食して死んだ。明から清への転換期、崇禎の進士陳子龍<sup>46</sup>は、民衆を集めて抗清の戦いを続けて敗北し捕まったが、南京への護送の途中、三十九歳の若さで川に身投げして自殺した。十九歳で進士になった詩人倪元璐<sup>47</sup>も、李自成が北京を攻め落とした時縊死した。上記の三人の自殺は、いずれも「周の粟を食わず」という「民族的気骨」のためであった。ここから見ても中国人に与えた儒家思想の影響はいかに大きいかがわかるであろう。

近代以降西側からの影響で自殺の原因も少々変化して、いろいろの社会的要因が入るようになった。「文壇の彗星」と呼ばれた王以仁は、才華に溢れて人生を探ることを自分の文学の使命として、長詩『靈魂の哀

歌』の中で、「バラが飛び散った芳しい土地を／私は捜し求める／ああ——私の辿ってきたのは／罪悪で敷かれた道路ばかりだ」と詠み、その中から、現実改造への道を求める屈原式の抱負が窺われる。彼が二十四歳で自殺したのは、通説として失恋だと言われているが、実際は憂国の情がないでもない。三十四歳で入水自殺した朱湘は、性質が率直ゆえに、安徽大学での講義の内容について大学当局と衝突し、怒りの余り辞職してしまった。原稿料の収入だけでは生計を立てられず、旅館の家賃を払えなくて旅館内に拘束されることさえあった。途方に暮れた彼は、舟で上海から南京への途中、李白の入水自殺した場所である采石磯で入水自殺した。文学者王国維の自殺の理由には色々ある。カントやショーペンハウエルやニーチェなどの哲学思想の影響によって自殺したという説もある。また羅振玉から借金を責められて困り果てた説もあるし、清の王朝に殉じたという説もある。陳舜臣氏も、「三年前にも一度自殺未遂事件を起こしたことを考えると、自殺の動機はやはり、没落し滅亡していく古い世界に殉じた<sup>48</sup>と考えるべきであろう」と書いているが、中国の学者はいう。

彼（王国維）は清が滅びてから溥儀の師匠をしていたが、皇帝復位活動に参加することは念頭になかった。しかし、あくまでも彼は溥儀の臣民で、自分よりも溥儀の安危を重要視しなければならなかった。彼は『君が侮辱されれば臣が死ぬ』という旧道德旧礼教の桎梏の下でどうとう『義は重ねた侮辱無し』という理由で、自分の生命を絶った。われわれは王国維のために忌む必要がない。この近代史上の優れた学者は、実際、旧道德旧礼教の殉道者である<sup>49</sup>。

一九四九年から一九七六年にかけての中国は、特殊な「政治文化」の時代で、とくに一九六六年のプロ文革の時期、著名な作家孔厥、老舍、傅雷、鄧拓、海默、楊朔、羅広斌、周瘦鵑、詩人聞捷など……自殺した文人・作家が驚くほど出た。自殺の伝統のなかった中国で、その時期これほど多くの自殺者を出したのは大抵政治運動によるもので、近代まで自殺者が少なかったのも、現代の政治運動で夥しく自殺者を出したのも、いずれも、儒教思想の影響によると思う。前者は「身体髪膚之を父母に受く。敢へて毀傷せざるは孝の始めなり」<sup>50</sup>、という影響であるが、後者は、儒教の「士は殺されてもいいが、侮辱されるべからず」<sup>51</sup>という「気骨」のためであろう。

プロ文革以降の文人・作家の自殺の原因については、八十年代中後期の社会の転換期に繋がっている。商品経済の衝撃によって、文学の方舟は狂熱的な頂上と、読者や社会の供えた神壇から墜落して立ち往生の境地に陥った。情勢の激変は文人の位置づけのやり直しを要請し、時宜になつて筆の方向を変えさせるが、適応できない文人は自殺に走りやすい。ルポ作家の徐遲の自殺は正によい例である。

#### 四 なぜ日本の文人・作家の自殺は多発であるか——作家という職業の危険性

創造は自分自身の血で描かれる記述である。文学者の極致とは、切腹の前に武士が辞世の句や歌を詠むのと同様の姿勢で、一生涯書き続けるような作家が書遺すものは、いわばすべてが辞世の歌だ。<sup>52</sup>

芸術家の世界は常に異常であり、病的である。創造的職業はうっかりすれば健康に有害と言える。なぜか

というと、作家は生命を創造するという比類なく魔術的な力を備えており、作曲家、画家などよりも、より多く創造者だからである。造物主の役割を篡奪しようとする志向は、他のいかなるジャンルの創造者よりも強い。自分の血で書かれたものであるから、そんなにやすやすと消されない。自殺した日本の詩人春月の次の詩

或る肉体は、インキによって充たされている。

傷つけても、傷つけても、常にインキを流す。

二十年、インキに浸った魂の貧困！

或る魂は、自らインキにすぎぬことを誇る。

自分の存在を隠蔽せんがために、

象徴の烏賊は、好んでインキを射出する<sup>53</sup>

は、作家とその作品との血肉の如き関係をいきいきと示している。詩人、ドイツ文学翻訳家としての生田は烏賊のように「インキ」で感傷的な詩多数と三巻からなる自伝体の長編小説『相寄る魂』を残して、船から湖の中に身投げした。

春月さんはペンで戦わなかった戦いを死によって戦い、ペンで書き上げなかった生きた詩を死によって書き上げたのである。<sup>54</sup>



創造は創造者に最高度の自由を感じさせる活動である。最高度の自由とは、恐怖の外に身を置くものであって、靈感というものに捉われている時、恐れるものは全然ないと言っても過言ではない。そんな時彼らは天の寵児のように、自らの命を絶つた同業者を見下げていた。が、時が経つにつれて、その自分自身も我が命を絶つ決意をする時が訪れる。三島由紀夫はそのよい例である。彼は三十歳の時、「私は自殺する人間が嫌いである。自殺する文学者というものをどうも尊敬できない」と放言しながら、十五年も経たないうちに彼自身も「自殺する文学者」となった。また、川端康成も、『末期の眼』のなかで、「いかに現世を厭離するとも、自殺はさとの姿ではない。いかに徳行高くとも、自殺者は大聖の域に遠い」<sup>56</sup>という大言壮語を發した何年か後に、やはりガス自殺を遂げた。

あらゆる芸術家の中で、作家は最も傷つきやすい。文人・作家は社会の脈動に敏感で、同じ苦悩でも並みの人よりもっと強く感じられ、自分の人生を小説と混同しやすい。二十一歳の若さで惜しくも自殺した文学少女久坂葉子がよい例である。川崎重工の創始者川崎正藏の孫娘に生まれた「箱入り娘」としての彼女は十四歳の頃、戦災で家屋を焼かれてしまった。泣き面に蜂というのか、次いで父親が「公職追放」され、勉強中の彼女は喫茶店などでアルバイトをして生計をたてざるをえなかった。天上から地に落ちた彼女の心は、その時から既に傷痕だらけになっていた。困苦の生活にくじけなかった彼女は、島尾敏雄や富士正晴などの指導で、十八歳で『ドミノのお告げ』という小説を発表し芥川賞候補者になって文名が上がった。昨年十一月頃の『朝日新聞』は、久坂葉子についての文章を載せたが、文章の副題は、「戦後の恋に散った久坂葉子」<sup>57</sup>であった。確かに久坂は伝統觀念に挑戦した勇敢な娘であって、彼女はある詩の中で隠すことなく京都のある男性への愛を告白し、そしてその愛が結実できないことへの苦悶を述べた。新旧時代の交叉した時代

に、才華に溢れた彼女は、生活の重荷を担がざるを得なかったし、古い伝統を打ち破って美しい愛情を追求しようとしたが、思うままにならなかった。不如意は彼女に宿命論を信じさせ、死以外に打開策がないと信じ込ませた。古い傷痕に新しい傷痕が加えられ、彼女は小説と現実を混同してしまつて、とうとう自殺したわけである。

何事も集団で一致して行われる日本社会では、もっぱら個人的な職業としての文人・作家は、当然ながら自殺しやすい立場にある。文人・作家は一人ぼっちの作業で孤独になりやすいが、孤独は自殺に密接につながったものである。浅原六朗氏は、牧野信一の自殺の原因を分析した時、

作者のもつ孤独地獄は、作者にしか解らないものである。作者はお互いにその哀しみをもっている。それをお互いに持ち合わせながら、慰め合うことのできない世界に作者の孤独地獄はある。<sup>58</sup>

と書き、また、

彼のお母さんが牧野の弟の子供をつれて海に行こうとした時、『さびしくっていけない。海なんかに行ってくれるな、ここにいてくれ』とたのんだそうである。しかし子供がせがむので、お母さんは子供をつれて海に行ってしまった。その留守に彼は死んでしまったのである。隙をねらつて自殺したのではなく、隙のなかに吸い込まれてしまったのである。<sup>59</sup>

と牧野が孤独を怖がって、自殺に走ったことをありのままに伝えている。太宰治の場合も、

自己独自の閉ざされた世界の中に住み、外界との生ける接触感の欠如にいつも悩まされていた。本質的に他者と了解不能であるという恐怖を持っていた。他者や外界には本能的に興味を抱かない。彼の関心は内閉的な自己の世界だけにあつた。<sup>60</sup>

個々から見れば、孤独は自殺の温床と言えそうではないか。

社会的現実には姑息的、妥協的態度を取らずにとことんまで突き詰めることは自殺に走りやすい。人間は大抵、いわゆる阿Qの「精神勝利法」があるなら、どんな事態が起こっても自分で悩みを解消させることができて、自殺せずにすむわけである。現代に比べれば、近代の文人・作家の中には、少なからず社会的現実には姑息的、妥協的態度を取らずにとことんまで突き詰めるような人がいた。彼らは、YesとNoのどちらかをあくまで守り通す性質がある。例えば芥川の場合、未来はプロレタリア階級のもので自分の出る道はないと決め付けて、「ぼんやりとした不安」を感じた。それに新しい時代に、彼の友人であつた久米正雄や菊池寛などは、通俗小説のなかから活路を見つけ、大きな成功を獲得したのに、芥川だけは頑として、いわゆる「純文学」の陣地に立てこもり続け、少しも妥協しようとしなかった。一作ごとに練りに練った挙げ句、彼の文学創作は枯れてしまうことが避けられないことになった。政治的にも文学的にも明るさを見出せないという事態に、彼は自然に自殺に逃げ道を求めたくなる。太宰治の場合は、なかなか自分の信条を変えようとせず、自分の墮落を大目に見られず、「失格」した人間として、死ぬよりほか道がないと決め付けていた。

僕たちはそれ以後、彼ほどに共感させられる文学を未だ知ることなく、彼ほどに純粹な真摯な作家を未だ発見することができないのです。<sup>61</sup>

なぜ文革以前の中国の文人・作家の自殺は少なかったかと聞く読者がいるかもしれない。前述したように、中国の文人・作家は、生死問題に対して、まったく別な文化系統に属し、觀念の上で日本人と全然違っている。中国の古代社会でも社会動乱、政治暗黒、専制迫害などしばしばあるが、中国の文人・作家は自殺より別な出道を見つけるようにした。魏晋時代の知識人がその代表的なものである。政治的迫害を受けた場合の普遍的な対策は、馬鹿のように狂氣のふりをしたり、毎日酔っ払って支配者の注意を紛らす。

一身不自保、何況恋妻子（自身でさえ自ら守れないのに、ましてや妻子を恋しく思わんや）。<sup>62</sup>

迫害が今にも来ることがわかっていた竹林七賢の一人、阮籍は、自殺せずに酔払いの振りで誤魔化した。

不与世事、遂酣飲为常（世事にかかわらず、遂に大酒を常とす）。

いま一人の竹林七賢、劉伶も有名な大酒である。そのほかに当局と合作せずに老子・莊子の道を嗜み、自殺するどころか、かえって延年益寿を求める。嵇康はその例である。「采菊东篱下、悠然见南山」と詠んだ陶淵明の方法は、役人の身でありながら帰省隠居し、仏禪を信じて空寂の境に入る。仏教の虚無的思想は彼

らの精神を支えて乱世の中で解脱を求め、自分の手で自分の生命を絶つ考えなど毛頭なかったのである。

## 五 日本人の文人・作家の自殺の特徴

日本の古代では、少数の男性が政治的失敗のため自殺するほか、女性の多くは愛情のために自殺する。中世では、情死よりも武士の自殺が多かった。それに対して、文人・作家の自殺は少ない。中世から近世までは、武人の切腹自殺も情死も多発し、益々日本人の自殺の伝統を固めた。明治維新以降、思想は幕府の支配から解放され、文明の進歩とともに見せはじめた社会の歪みに抵抗するように、文人・作家の自殺が多発する。それらは社会に訴えるものが多かったので、デュルケムの言う「アノミー自殺」の類に属している。軍国主義時代には、集団本位的自殺が多発するが、文人・作家では少ない。戦後になって主に社会との矛盾による文人・作家の自殺が種々起こるが、いずれもケースバイケースで一概に論ずることは出来ないのである。

次に三つの面から見てみよう。

### (一) 日本人の特殊な倫理観、死生観と価値観

世界的にその名をよく知られる五名の日本の作家のうち、谷崎潤一郎だけが無事に一生を全うした。あとの芥川竜之介、太宰治、三島由紀夫、川端康成の四名とも自殺した。前章で述べたように、自国の人々が誰も彼も集団を組んでいるのに、作家だけが孤独な創作エネルギーで時代に対抗するよりほかはない。それで

もし書く力が尽きたり、靈感が枯れたり、憂鬱やパニックに陥ったり、思想的行き詰まりが出たりしたら、自民族の倫理観に打開策を求めるのである。日本の作家の場合、各国の作家に共通するものに加えて、日本民族なりの「郷土色」を帯びない筈はない。

日本の倫理思想は神道が基礎となっており、日本人の道德価値観の中に宗教心理と宗教情緒として深く存在する。中国の倫理思想は、血縁関係、宗法制度を基礎としているから、これによって形成された等級身分制、権力本位観念は今もなお中国社会に影響を与えている。<sup>63</sup>

日本人の倫理思想は、ほかの国々と全く違った歴史文化の背景の下で生まれ、発展してきた。紀元五世紀まで日本には土着民俗信仰としての神道思想があった。『古事記』、『万葉集』などに見られるように、すべてを神の威力に帰して、現世を肯定、生命を謳歌する思想であった。

日本の倫理思想を変化させたのは、中国の儒教と仏教の導入である。紀元七世紀の初めに、聖徳太子は政治変革を目指して留学生を中国に派遣し、直接、儒教と仏教を導入した。その時から日本の倫理思想は、神道から儒仏思想を吸収する方へと変容したが、当時、自殺を認めない文化としての儒教は、主に仏経などへの信仰と崇拜に止まり、社会生活の道德の中には、まだ沁みこんでいなかった。一方、八世紀になってから仏教は国教とされ、以来、江戸時代まで仏教倫理はずっと社会生活の中で主導的地位を占めるようになった。仏教文化は、死を容認する文化であって、中国の浄土思想が伝わって以来、早く死んで極楽浄土に往生しようとする者が増える。仏教では、「生あるもの、形あるもの、必ず滅す」という理念に発端し、肝心なのは、

浮世の儚さを悟って仏のお慈悲を乞うこと。仏は芸芸たる衆生のことを可哀相に思つて、死を以て浮世からの解脱を諭す。したがって浄土宗系仏教では、死のことを死と言わずに「往生」と言う。浄土思想は、死を容認する文化的背景を作り出した。

浄土往生の願いは、社会組織の下で生きざるを得なくなつた人間が、名聞利養といった非本来的な価値や欲望に衝き動かされて生きる状況を、如来の智慧によつて虚妄の現実と気付かされたところに成立した願望であつた。命の営みの根源から、人間意識の表層に念仏という幽かな回路を通して届けられた智慧が、浄土願往生の心であつた。<sup>64</sup>

単一の宗教に偏執するのを好まない日本人は、神、儒、仏が並立し、競い合い、習合し、道教、道家思想もそれらと並立しているにもかかわらず、神道、仏教思想の影響で、日本人は現世を肯定する思想よりも死を容認する思想が強いようである。

十六世紀中頃、キリスト教も鹿児島に上陸し、日本に伝わってきた。キリスト教で最も大切なのは、死んで魂が天国に行くこととされることである。この世はその準備のためで、用意のない魂は地獄へ落ちる。堅く自殺を禁じ、この世での生存はいくら辛くても、それに耐えられる人が天国に行けるといふ。神の作つた生命を、人間が勝手に絶つと言ふことは、創造主にたいする反逆だとされる。しかし幕府の鎮圧によつてキリスト教は日本の支配的宗教にはならず、死を容認する思想はあまり影響を受けなかつた。

江戸時代は、日本儒学の発展の最も輝かしい時代であつて、理論的に朱子学派、古学派、陽明学派などが

形成され、封建主義的道徳思想がよりいっそう実った。鎌倉時代から発展してきた「武士道」が、神道と仏教の影響のほか、儒学の影響をも受けて、武士の道徳は更に理論化、系統化された。

仏教は武士道に運命を穏やかに受け入れ、運命に静かに従う心を与えた。

神道は、武士道の中に主君への忠誠と愛国心を徹底的に吹き込んだ。<sup>65</sup>

また、それは江戸時代に儒教思想の朱子学などに裏付けられて、封建支配体制の観念的支柱となった。忠誠、犠牲、信義、廉恥、礼儀、潔白、質素、儉約、尚武、名誉、情愛などを重んずる。

もし、名誉と名声が得られるのであれば、サムライにとって生命は安いものだと思われた。そのため生命より大事だと思われる事態が起これば、彼らはいつても静かに、その場で一命を棄てることもいとわなかったのである。<sup>66</sup>

すなわち、日本人の価値観は、集団のため、自身の名誉のためなら、いつでも自殺する心構えでいるというものである。武士道のこの死生観は、日本人の死生観に多大な影響を与えた。後になって武士道は軍国主義者に悪用されて、侵略された国々の百姓を無断で殺す道具に成り下がったが、日本の武士たちの自殺は、いわば標準的なデュルケムのいう「集団本位的自殺」と言えよう。

国家仏教としての仏教思想の影響が重いせいか、日本人は、死を終点と看做さずに、起点と見ている。芥



川は、「けれども、自然の美しいのは、僕の末期の眼に映るからである」と書いている。川端康成と三島由紀夫の「輪廻転生」信仰は周知の通りであるし、透谷や太宰なども死をいろいろに美化し、理想化したり、憧れさせたりしていた。こういう思想は、ある程度、自殺を助長する働きを果したと言えよう。透谷は、「死や、汝何時来る？／永く待たすなよ、待つ人を」との詩句を書いているし、太宰は「やはり三日に一度は死ぬことを考え」<sup>68</sup>との言葉を残して自己の死を予期していた。大正十年十一月二〇日に、教え子梅子と千葉県の海岸で心中した評論家野村隈畔の自殺直前の日記には、

十月二日、愈々革命来る。自由実現の絶対境に入るのである。四日、永遠の世界を憧れている者は、俗人には分るものか……永劫無限の世界に旅立つ、是れ哲人の希望であり、歓喜である。明二〇日こそ断じて決行しなければならぬ、日誌は今日で終を告げる。永劫への世界の旅行者 隈畔<sup>69</sup>

とあるが、自殺のことを、何か憧れの未知の海外旅行のようにさえ思わせるではないか。

一方、昔から、日本列島のなみなみならぬ生活環境、頻発する台風、地震、火山噴火などの自然災害による死亡の突発性と不可抗力は、日本人に仏教の「人生無常」の観念を強めた。この観念の支配の下で、日本人は切に生命を把握し、生を大切にする一方、死亡を尊敬したり、崇拜させたりする。いわゆる「惜生崇死」である。日本人の理念には、『菊と刀』に書かれているように、一二律背反な面がある。「仕事の鬼」と言われるほど懸命に働く一方、また思う存分娯楽を楽しむ。極端に自我を抑圧する一方、また極端にストレスを紛らすことをする。日本人の民族的心象と民族精神は、このように矛盾だらけである。

日本のこうした特異な思想史と価値観によつて、自殺を制限する宗教観はないと言えそうである。自殺は、ある特定の場合の問題解決の手段として、かなり多くの日本人の心の中に根を下ろしてきた。これはさらに、「死はすべてを浄化する」という贖罪思想にまで繋がってきた。「引責自殺」も多く出る。因みに、日本人は、昔からの古い自殺の伝統がある。日本語から外国語に入ったものとして、どの言語の辞書にも、有名な二つの語があるという。それは、「切腹」と「神風」である。この二つの単語とも自殺にかかわるのである。確かに、日本ならではの文化である。日本における自殺は、愛するものにとつては悲劇であることに変わりはないが、文化的には恥辱なことであるとか、宗教的な嫌悪感を伴わないことも事実である。それどころか、自らの手でこの世に別れを告げることには、むしろ崇高さに近い感情が存するように思われるのである。西洋人は、精神が錯乱したり、権利を剥奪されたり、絶望したり、もしくは利己的でさえあったりした者が最後に行き着く場として、自殺をとらえる傾向がある。中国人は、迫害されて途方にくれる時以外に普通は、自殺を考えない。それに対し、上に述べた原因で、日本は、文化的には全く特異な性向を持っており、特定の場合の自殺という考え方は、日本文化にもっと深く根差したものである。

## (二) 日本人の自殺の古い伝統

次の例を見れば分るように、そもそも古代日本社会の自殺というと、圧倒的に多いのは、恋の葛藤から死を選んだ女性たちであり、その精神構造から言えば、感情的な自殺と言える。男の自殺なら大抵、政治的な失敗による自殺のケースが多い。

自 殺 者	原 因	出 所
桜児 (さくらこ)	二男が一女を争うことから、女が林に入って縊死	『万葉集』
蔓児 (かずらこ)	三人の男から愛され、解決されず、池に身投げ	『万葉集』
菟原処女 (うないおとめ)	二人の男に愛されて、男たちを仲良くさせるために、自殺	『万葉集』
赤猪子 (あかいこ)	雄略天皇から八十年も待たされた結果、自殺	『古事記』
サホ姫	兄サホ彦のために自殺	『日本書紀』
大友皇子 (おとおものおうじ)	壬申の乱の際、吉野軍の宮廷乱入で逃げられず、縊死	『日本書紀』
蘇我蝦夷 (そがのえみし)	大化の改新の際、火中に身を投じて自殺	『日本書紀』

(中西進氏の『古代社会と自殺』<sup>70</sup>を参考にしてまとめた)

右の例には神話伝説のものが混ざっているが、文献に記載される実在の人物中、切腹の一番早いのは、中世の平維盛の自殺(『平家物語』)、十三世紀から『古事談』に出ている藤原氏の末裔藤原保輔の「立腹自殺」、その後一一七〇年(？)、源為朝三二歳の割腹がある。鎌倉時代から戦国時代にかけて、武士道精神と禅宗精神が流行り、武士の切腹が多発した。たとえば、一一八九年の「判官」源義経の自殺などがある。

元禄時代以降、切腹と心中の歴史は事実よりも文芸に移る。文学作品『平家物語』と史書『我妻鏡』には、平維盛、平敦盛、熊谷直実などの死が描かれている。維盛の場合、集団から離脱した時、既に出家、入水を決めている。集団からの離脱はつまり一種の自殺行為であった。もちろん、入水や焼身などで、浄土での再生を願うという宗教的性格も帯びている。敦盛の場合は、武士の名誉のために、直実から逃げなさいと言われても逃げようとせずに、とうとう直実から討たれた。逃げられる機会を与えられても逃げずに名誉の死を

遂げたことも、實際一種の自殺である。なお直実の場合、我が子が頭に浮かんで、やむを得ず敦盛を殺してから出家遁世したのも、實際やはり一種の自殺と言えよう。したがって、村井康彦氏は

中世の自殺ないしは自殺的行為を特質づけるものとしては、このような宗教的な意味をもつものとともに、武士社会の発展のなかで見られたそれを見落とすことはできない。なぜなら、武士社会に生まれた主従意識の昂揚、それを基調とする武士の実践倫理ともいふべき「もののふの道」、「武者の習」は、つねに死と隣合わせであつたから。「武士道とは死ぬことと見つけたり」とは、近世武士道の書『葉隠』の言である。<sup>71</sup>

と説明しており、

こうした中世の死―自殺の（的行為）精神構造を検討するとき、自分自身を客観的にある種の状況に追い込んだうえではじめて行動を決定するという、こんにちでも日本人にみとめられる精神構造と行動様式とが、実は中世に形づくられたものであることが思われてくるのである。<sup>72</sup>

と結論している。

封建時代の日本において、自殺の作法が儀式化され、たとえば、江戸時代では、有名な赤穂四十七浪士の復讐後の全員切腹や美濃平野の治水の失敗による薩摩藩士三十五名の引責切腹などがそれである。

情死・心中も自殺の一種である。宮島喬氏は、「わが国で『心中』とよばれる複数自殺のうち、情死は、恋愛感情をとまなうものをさす」と書いており、周作人は、「情死のことは『昔からあるものである』、南北朝時代には、記載が見られるが、『心中』という名称は徳川時代の産物であった」と書いている。なぜ近世になってから、心中・情死などは多くなったのか。宮島喬氏は

封建身分制度の確立した江戸時代には、武士階級の道徳が支配的な位置に立ち、家の観念、貞操の觀念がつよめられ、未婚男女の交際は禁じられ、身分の差のある者どうしの結婚はゆるさなくなる。しかし、農民や町人の階級には、自然の性愛を肯定する古来の伝統がある程度存続しており、とくに経済的に台頭する町人は、その金力にものをいわせて遊女たちと性愛を享樂することが可能になる。こうした性愛の肯定や結婚の否定という二つの価値の対立という背景のもとで、主として町人のあいだに情死の流行がみられるにいたった。

と大原健士郎氏の説明を引用している。

なお、近世では、文学作品の中に出てくる自殺の形は、「切腹」と「心中」が多数ある。たとえば、黙阿弥『加賀鳶』の五郎次の入水、『三人吉三』の土佐衛門伝吉の入水、『弁天小僧』の中の弁天の「たちばら」、西鶴の『好色五人女』の中の樽屋おせんの自殺、『忠臣蔵』の中の判官の切腹など。心中情死も切腹と並んで近世社会の特徴的な自殺である。たとえば、近松の『曾根崎心中』の手代徳兵衛と遊女お初との心中、『心中天網島』の中の紙屋治兵衛と遊女小春との心中などがある。近世の自殺は、要するに、罪状刑罰からの逃

避や厭世や生活難や失恋などのものではなくて、封建社会的関係連帯の中における自己以上の誰かのために自殺するタイプが多い。だから、ある学者が「日本近世劇の自殺の大半は第二の愛他的自殺だ<sup>76</sup>」と言っている。

近代の明治時代には、文芸評論家の北村透谷や小説家の川上眉山などが自殺したが、大正時代になってから、作家有島武郎の波多野秋子との心中事件があった。多くの人々から「男女心中」と取られていたが、それは単なる心中ではないと思う。太平洋戦争時の「神風」特攻隊と「回天」人間魚雷は自殺ではあるが、本来の意味で言えば、脅迫的な自殺と言えよう。昭和時代以降、世界中の注目を集めた「武士道精神への回帰に象徴される」とされる作家三島由紀夫の一九七〇年の自決などは、全世界の世論を賑わわせたし、その後、の川端康成のガス自殺も、いろいろの謎を世の中に残した。有島と三島という二件の自殺は、人々に近世の心中と切腹の尾を引いたかのように思わせた。

したがって、この特殊な死生観の問題は、日本人文人・作家の自殺者が多い重要な原因の一つだと思う。

### (三) 日本作家の独特な文学理念と審美観

日本文学は、その歴史的原因や地理的原因や気候的原因や風土的原因などで、上代から、ほかの民族と違った文学理念を形成してきた。

上古の日本民族は現実の事物に素朴な親近感を持ち、自然に「まこと」の文学理念を形成した。皇室や民間に伝えられてきた神話・伝説・説話や歌謡は、天皇中心の国家体制の確立や国威の誇示を意図し

て編まれた『古事記』、『日本書紀』、『風土記』に取り入れられた。……古代の人々はこの大和の風土の影響を受けながら、明朗素朴でたくましい気風をはぐくんできた。その気風は、そのまま上代文学にも反映され、感動を率直に表現した素朴で力強い「まこと」の文学を生んだ。<sup>77</sup>

ところが、世界を悲しむという仏教の人生観は、思想意識体系のバックに欠けていた日本の美意識の中に素早く浸透するようになった。樂天的に現世に直面する、「まこと」の美学観は、悲しみに溢れた「もののあはれ」に取って代わられた。

中古文学は優美・繊細な情趣を基調とする。その中心理念は、しみじみとした「もののあはれ」である。それは、生活に調和的優美さを求めてやまぬ平安貴族が生み出したものであり、はなやかさの裏に、社会の矛盾を鋭く感じ取って、苦悩の日々を送った女性たちが生み出した理念でもある。「もののあはれ」は紫式部の『源氏物語』で完成した。<sup>78</sup>

浄土宗は貴族や庶民のなかに普及した。それは、この汚れた現世を厭い（厭離穢土）、一心に念仏を唱えることによって、死後は極楽浄土にゆくことを求めよ（欣求浄土）と説き、悩める人々に光明をもたらし、文学にも深く浸透した。

「幽玄」は、「もののあはれ」の流れをひくもので……南北朝時代から室町時代にいたると、正徹が余

情妖艷美の幽玄を唱えたのに対し、心敬が氷のように冷え冷えした平淡な美の情趣を求め、近世の「さび」につながっていくのである。<sup>79</sup>

中世になって動乱に次ぐ動乱は、人心に不安から逃れようとして、心の救いを宗教に求めさせた。この時代の文学には、優雅な貴族文学から現実的な庶民文学へ移行する過渡的な姿が見られる。宮廷貴族は氣力を失い、武士は戦乱に追われて文学に志す者が少なかったので、文学の担い手として、戦乱をよそに文筆に親しみ、作品を残したのは、主として僧侶・隱遁者であった。したがって、鴨長明の『方丈記』、吉田兼好の『徒然草』、源平盛衰を描いた『平家物語』などは、仏教的無常觀の色の濃い文学として、後世の人々の人生觀や死生觀などに多大な影響を残してきた。

近世になってから、文学理念としては、町人文学の「粹」、「通」、「意氣」などが生じたが、蕉風俳諧は、閑寂・枯淡の境地を求める「さび」を求めていた。

芭蕉の「さび」は、内面的で、しかも人間的なものの中に発見された「心の色」といえよう。<sup>80</sup>

桜は、綺麗でありながら命を惜しまずに、燦爛たる咲き盛りを過ぎると未練なく萎えて、大地一面に落英で飾りまくる。日本人はあたかもこの桜のように、咲かないならば、それまでであるが、咲くと言えば燦爛として咲かなければ氣がすまないものである。

特に切腹自殺を美化する風潮として、江戸時代の浄瑠璃作家近松門左衛門が二十年間に十五点、自殺を描



く本を書いたと言う。腹を割って首を切つて血が二メートルあまり迸り、その苦痛は烈しいものの、日本人は、これは「壮絶」というくらい的美だと思い、痛みを我慢する時間が長ければ長いほど、美しいという。日本人の中には、切腹してからの流血を眺めることを美談として、それは、たとえようないほど美妙で壮烈なものだという人もあつたそうだ。惨めであればあるほど壮烈になるのである。三島の切腹が求めたのは、まさにこういう「美」の効果と言えよう。

近代に入ってから、外国からいろいろの文学思潮が導入され、日本に色々な文学流派を形成させてきたが、「もののあはれ」「さび」などという哀愁の色と日本人独特の審美観は、相変わらず一部の作家の頭脳に残り、それはそのままその作品の中に表れ、それは言うまでもなく、自殺を誘発するもつてこいの条件となる。七十二歳でガス自殺した作家川端康成とその作品が、典型的な例である。彼は『哀愁』の中で次のことを書いている。

敗戦後の私は日本古来の悲しみの中に帰つてゆくばかりである。私は戦後の世相なるもの、風俗なるものを信じない。現実なるものもあるいは信じない。<sup>81</sup>

川端の美学意識の中で、伝統的「真・善・美」は「哀愁・虚無・幻覚」の美と変容してしまった。

## 六 中国人の文人・作家の自殺の特徴

中国の文人・作家の自殺は、古代から清末にいたるまでは、わずかな人数であつた。民国から一九四九年に至るまで、やはり少数であつた。一九四九年から一九七六年までは、政治運動で知識人を抑圧する迫害によつて自殺した文人・作家は多数になつた。一九七七年から一九八五年まで社会は安定していたので、文人・作家の自殺は少数であつたが、一九八六年から現在にいたるまで、転換期による矛盾とショックによつて多発した。この時期の文人・作家の自殺は、デュルケムの第三種類の「アノミー自殺」に属している。

次に三つの視角から見てみよう。

### (一) 中国人の死生観、倫理観、価値観

儒家では、「未知生、焉知死」(いまだ生を知らず、いづくんぞ死を知らん)、「未能事人、焉能事鬼」(いまだ人に事うること能わず、いづくんぞ能く鬼に事えん) (『論語』) と主張している。が、一方、「殺身成仁(身を殺して仁と成す)」「舍生取義」(生を捨てて義を取る)」という言葉が示すように、「仁」「義」のためなら、自分を殺してもいいということを主張している。例えば、幸徳秋水は、伊藤博文を暗殺した安重根の行動を、「舍生取義 殺身成仁 安君一挙 天地皆震 秋水題」(生をすてて義をとり 身をころして仁をなす 安君の一挙 天地みなふるう)と褒めていた。幸徳も安も中国人ではないが、もちろん中国の儒教思想の影響を受けていたであらう。

なお、孔子は論語「里仁編」において言う、「朝聞道、夕死可矣(朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり)」

と。

まとめれば、儒教では生を惜しむ一方、仁を目指したり、道を習得したりする場合、決して死を恐れないという態度である。つまり、必要がある場合の自殺を認めないのでもない。例えば、老舎や傅雷や鄧拓の場合、その自殺はいずれも儒教の影響によるものである。

道家では、自殺を容認しないばかりか、「自然」「無為」「修身」を主張し、煉丹によって長生きさえ求める。「禍莫大於不知足、咎莫大於欲得」（足りるのを知らないことくらい大きい禍はない、得しようとする欲くらい大きな咎めはない）（老子、『道德経』）と、楽天知命を提唱していて、煉丹によって長生きを求める。

仏教では、輪廻転生、来世を重んじるが、仏教が伝わってきた時、儒家思想の倫理観が既にしっかりしたものとなっており、儒家では、社会生活の理性精神を重んじるので、それによって、「人々はめったに空想して精神的な『天国』を追及し、人倫道の生きた経験生活を離脱して超越、先験、無限と本体を追及することをしない」<sup>82</sup>。

## （二）中国の文人・作家の文学理念と審美観

儒家思想の強い影響で、中国文人の文学理念は歴史を貫くものがあつた。それは「詩言志」や「文以載道」という観念である。『尚書・舜典』には「詩言志、歌永言。聲依永、律和聲」（詩は志を言い、歌は言を詠む。声は詠みにより、律はその声に和す）とある。『文心雕龍』には、「大舜云：詩言志、歌永言」（卷二明詩第六）（大舜曰く、詩は志を言い、歌は言を詠む、）が書いてある。

「志」とは何か。「志」とは、内心に隠される思想感情といえそうであるが、先秦以来、儒家は「詩言志」

を主張し、詩を政治道德の道具としていた。それでも、実際、「思想」「志」「抱負」を重んじるが、思想感情は排除していなかった。前後漢になってから、「廢黜百家、独尊儒術」と言つて、儒家思想は學術文化の凡ての分野を制御していた。『五経』は一切の文学作品を計る最高基準となつてきた。漢の儒者の目から見れば、文学は経学の従順な奴隷にすぎない。彼らは、詩歌の政治教化の作用を強調し、詩歌には、道を載せることを要求していた。したがつて、「志」は「情」を遠ざかり、「道」「義」に偏ることを要求された。

「文以載道」も中国古典文学の基本的理念の一つである。「道」とは何か。ここでは「道」とは「儒家思想」をもつぱら指している。宋の「五子の一人」周敦頤は「不載物之車、不載道之文、雖美其飾、亦何為乎」（『文辞第二十八』、『周子全書』）（物を載せない車、道を載せない文、その飾りは美しいが、亦何の使い道があるか）と言つて、「載道」の重要性を強調した。実際、孔子、孟子の思想の中には、既に、「文以載道」のような思想が含まれていた。ただ周敦頤はそれをまとめて、最初に「文以載道」という言葉で、こういう理念を表した人物である。儒学、宋学（程朱理学）がいずれも官学となるにつれて、「文以載道」は中国古典文学の「最高指針」となつてきた。

「五四運動」の「新文化運動」の中では、ある程度、こういう文芸理念は批判されたので、「五四」以来の文学には、政治を離れて人間の情けと情欲を描いたものが現れた。そして、王以仁、朱湘などの自殺した文人・作家も現れたのである。專制的国民党時代の「莫談国事」（国事を語つてはいけない）や延安時代以来の「文芸は必ず政治に奉仕しなければならない」などで、中国では、五四以来の魯迅らの作品以外に、自律性のある文学というものは、ほとんどなかったのである。体制反対とか、哀愁色彩とかいうものはかなり少なかった。こういった文学理念が、作家の自殺を誘うことは、まずないと思う。

次は、中国人の審美観を見てみよう。中国人の美意識は社会生活の理性精神に富んでいる。儒教では、美の社会性、功利性を重んじている。

・「发憤忘食、乐以忘忧、不知老之将至」〔『論語』、憤りを発して食を忘れ、老いのまさに至らんとするを知らざるのみ）。

・「有朋自远方来、不亦说乎」〔同前、朋あり遠方より来たる亦た樂しからずや）。

・「天行健、君子自强不息」〔『周易』、天行健なり、君子自らつとめて、息まず）。

・「虽九死其犹未悔」〔屈原、「離騷」、九死と云えども猶悔いぬ）。

儒教の美学観は美の社会性、功利性が強く、社会生活、倫理道德につながる。道教では、人格精神と天地自然との統一を求めている。

・「搏扶搖而上者九万里……背負青天而莫之夭闕者」〔庄子、『逍遙遊』、扶搖に搏ちて上ること九萬里……背に青天を負いて、之を夭闕する者なし）。

上記から見て、道教は人間が物によって役されることに反対し、「自然」「無為」を主張し、人格心身の絶對な自由を要求するからと言って、人生が嫌になり、来世を求めることはしない。「苦海无边 回头是岸」〔苦界は果無し、悔い改めば救わる）と主張している仏教が中国に伝わってくるまでに、儒家、道家及び先秦の諸子百家はもはや中国固有の道德体系を完成し、これらの思想はいずれも仏教の思想と相殺する働きがあるのである。したがって中国人には、仏教の影響による悲觀厭世の美意識はたいへん少ないのである。

上記から見て、中国人の美意識は社会生活の理性精神を重要視し、人々はめったに空想して精神的な天国を追求しない。虚無的精神的追求は少ないのである。

(三) 中国人には昔から自殺の伝統がない

中国の民間俗言の中の、次のようなものは子供でも老人でもよく口にしている。

・「好死不如頼活着」(いくら優れた死でも辛うじて生きることにかかず)。

・「忍辱偷生」(侮辱を忍んでうにか生きていく)。

・「蝼蚁尚且貪生、何況人乎」(虫けらでさえ生を貪るのを知っているのに、ましてや人間はなおさらのとだ)。

これらは中国人の死生観をよくあらわしている。こういった死生観は、中国の特別な社会歴史の要素によって形成されたものであるが、この中には、中国人の倫理観、価値観が潜んでいる。

奴隸社会では、「普天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣」と言われ、貴族に反対する古代ギリシア、ローマのような強大な平民がなく、氏族から転じてきた奴隸主の貴族のみが政權を握っていた。国家が作られてからも、元の血縁関係から離脱しなかった。封建社会では、小家庭を単位とする農業と手工業の結合で、安定して自己調節できたので、資本主義の芽生えを抑えていた。そして支配階級は文化専制主義を推し進め、秦の始皇帝の「焚書坑儒」、漢の武帝の「廢黜百家、独尊儒術」など、人々の思想を制圧してきた。科擧を通じて人材を選抜する一方、他方では残酷に異端を弾圧して、「学」と「仕」に結びつけるようにした。

したがって倫理思想は政治と一体化し、強固な血縁と宗法色彩を帯び、強烈な「中庸」の息吹を持っている。それで人倫、精神、人道を重んじて、倫理を実現し、功業を達成させることを生命よりも高いものとされていた。

儒家と道家の思想の影響によって、「五四運動」までは中華民族の自殺率は低かった。「五四運動」の「孔

家店を打ち砕け」による儒家思想の弱まりによって、いくらか自殺者が増えた。

## 七 近代日本における著名な作家の自殺をめぐって

自殺した日本の文人・作家には、いうまでもなく前述のほかにそれぞれ自分なりの理由があるのである。資料収集と紙幅に限りがあるので、日本近代以来最も影響のある十人の自殺だけを例にして、その自殺の原因を分析してみよう。いくつかの項目により比較する一覧表を次の通り作ってみた。

氏名	生年月日	自殺年月日	年齢	生計難	自殺手段	女性問題	自殺の理由と事柄
北村透谷	一八六八・一一・一六	一八九四・五・一六	25	有	縊死	有	理想主義で、社会の抵抗に敗北した
藤村操	一八八六・七	一九〇三・五・二二	16	無	滝に身投げ	有?	人生への思考で行き詰った悩み
川上眉山	一八六九・三・五	一九〇八・六・一五	39	有	剃刀	無	文壇での行き詰まりと生計困難
有島武郎	一八七八・三・四	一九二三・六・九	45	無	心中縊死	有	社会への絶望で恋に逃げ道を見出した心中
芥川龍之介	一八九二・三・一	一九二七・七・二四	35	無	睡眠薬	有	未来社会への不安
牧野信一	一八九六・一一・一二	一九三六・三・二四	40	有	縊死	無	人生への絶望、生計困難、孤独

太宰 治	一九二九・六・一九	一九四八・六・一九	39	無	投水心中	有	誠実を極めた「恥の文化」 「罪の文化」の典型的犠牲
原 民 喜	一九〇五・一一・一五	一九五一・三・一三	46	無	鉄道	有？	無残な人間同士の殺戮への 抗争
三島由紀夫	一九二五・一・一四	一九七〇・一一・二五	45	無	切腹	無	大日本帝国の古い時代に殉 じた反社会的な切腹
川端 康 成	一八九九・六・一四	一九七二・四・一六	72	無	ガス	無	美の発掘の中で涅槃に憧れ る

十九世紀後半になって、鎖国の眠りから覚まされた日本は、激変する世界の情勢に追いつくために、絶対主義の政権の確立、立憲政治の採用、経済の資本主義化、植民地の獲得など、短期間に一挙に実現しようとして、まっしぐらに突進した。十九世紀末から二十世紀はじめにかけての日本の近代史は、西洋社会の進歩を圧縮した形で一時に再現しようとした時代であった。西洋の目覚しい進歩は、長い伝統を基礎として初めて可能であったが、ところがそういう基盤を持たず、鎖国期の孤立した社会から突如として近代社会への転換を企てた日本の場合には、数え切れない複雑な問題が現れた。最も社会に敏感な階層としての知識人は、社会の抱えた問題に気づきやすい。しかも、それへの反感から、批判を加えたり、抵抗したりして、大人しくする「順民」は少ない。したがって、文人・作家の自殺は、ある程度から言えば、社会の風見のようになっている。文人の自殺の様子から、大体、その当時の社会の事情を窺うことができるわけである。

筆者があげた日本の最も有名な自殺文人の置かれた時代は、北村透谷の生まれた一八六八年から、川端康成の自殺した一九七二年にわたって、前後して百四年、一個世紀あまりである。日本の時代区分から言えば、ちょうど明治維新の年から、沖縄返還実現と日中共同声明国交正常化の年にかけてである。明治時代全般、



大正時代全般と昭和時代の大半をカバーしている。前述の分析を通じて、我々は、文人の自殺は殆ど、社会の脈動に深くかかわっていると分る。北村透谷の場合、近代自我と時代・社会との対峙相剋を認識し、魂の触覚を近代の外部に伸ばそうとし、社会の猛烈な抵抗に遭遇し、社会に自我の確立を求められず、悩みの挙句、遂に若くして生命を絶つたし、自殺のドミノ効果を引き起こした十六歳の一高学生藤村操も、天皇絶対主義・国家主義思想の蔓延の中で、近代自我に目覚め、「先に国家、後は個人」に哲学的懷疑、苦悶、絶望した結果、自殺したのである。この二人の自殺は、もちろんデュルケムの言う「社会的統合力」にかかわっていた。

一方では、明治時代は江戸時代ほど統制が強くなかった点において、この二人の自殺は近代社会の文明や進歩を標識してはいるが、もう一方では、彼らの自殺した時の社会は、決して統合力が弱い方でもないのである。むしろ明治中期の天皇絶対主義や国家主義思想がのさばっていた時代と言えよう。明治維新はアジアのどの国よりも早く、立ち遅れた封建的生産関係生産方式の束縛を突き破って新しい生産方式と社会文化を成功裏に作った一方、維新以降の「富国強兵」の政策は、列強の弱肉強食の国際規範に因襲し、侵略略奪の歪んだ道にずれたので、先覚者が、必ず、それを疑ったり、それに反抗したりするのは当たり前である。この二人の自殺は全く自己本位とは言えず、後の人々に対する先駆や目覚ましの作用があり、少なくともある程度、積極的自殺といえそうである。それで、ある意味では、デュルケムの理論では説明しにくくなる。

川上眉山の場合、侵略に拍車をかけて、人民の生活難に見向きもしない明治政府のもとで生計に困った上、自然主義思潮の氣勢にのまれた悩みから自殺したのである。文学的に行き詰まりという点では、自己本位の種類というデュルケム理論に当て嵌められるが、もう一方では、まさにデュルケムの見逃した経済的原因に

よつたものであるので、デュルケム理論はやはり当て嵌まらないのである。大正時代に自殺した者は、この十人の中、有島武郎ただ一人であるが、彼の自殺は男女心中の形ではあるが、逍遙の言う「消極的自殺」の類に属している筈であつて、宮島喬氏のまとめた「宿命的自殺」の中に分類できそうに見えるが、前述したように、その深層的原因として「第四階級」の発展を予感し、自階級の前途への絶望を感じた上、社会道德から追い詰められて、知識人の潔癖から、経済的方法で解決しようとせずに、愛情至上に逃げ場を見つけて、「生命の燃焼」という自殺をしたのである。したがつて、有島の自殺もデュルケム理論では、完全に説明されにくい。

昭和時代になつてから、芥川龍之介の自殺は、精神的要因以外に主として彼自身が言つたように、未来社会への「ぼんやりとした不安」がその要因である。牧野信一の場合も、その本人の神経衰弱も原因の一つであるものの、「二・二六事件」発生の九カ月後、国内の右翼勢力の台頭が牧野の社会への絶望をもたらさなことは、断言できるであらうか？ましてや、牧野の場合、眉山と同じように、生計困難というデュルケムの見逃した原因もあると思う。有島、芥川、牧野の自殺は、確かに社会的原因に関わつてはいるが、社会的統合力が弱くなつたという明確な証明が見られないではないか。

太宰治の自殺は一九四八年に起こつたのであるが、その当時の社会はまだまだ「特需」とか「神武景気」とか「岩戸景気」とかいう経済飛躍の気配は毛頭見せていなかった。焼け跡や闇市などの敗戦のシンボルともいふべきものがなお残つていた。とくに、侵略戦争を起こして「御国」のことを無限神聖なものとし、人間の個人の自由と利益は、殆ど全部奪い取られてしまう戦争中の思想への統制さえなければ、敗戦後、その反動としての墮落鼓吹に全力を尽くした無頼派が生ずることは、まずない筈である。したがつて太宰治など

の退廃と墮落もあるはずがない。したがって、あくまで追求すれば、無頼派の退廃、墮落と社会への絶望の根源は、やはり、この「大東亜戦争」にあるのではないかと思う。もちろん、戦後の滅茶苦茶な社会で、ほかの人はなぜ自殺しなかったのかという点からすると、太宰や田中英光自身には、確かに彼ら自身の原因も認められる。太宰と田中の自殺はある程度、デュルケムのいう「アノミー型自殺」に近いと思う。

社会的要因を最も著しく表現したケースは、原民喜の自殺である。研究者たちはいろいろ民喜の精神的要因を過大視して、その社会的原因を見逃した。虚無的要素も否定できないが、米、ソなどが核戦争を起こそうとして社会に核の脅威をもたらしたため、彼は戦争に対しての反感、抵抗と恐怖から発する人類の前途への絶望などが主な原因となって自殺したのである。当時の情勢が、核戦争になりそうな危機一髪のものであれば、原民喜は、ひょっとしたらもう少し生き延びただろうと思う。

ところで、七十年代初めの三島由紀夫と川端康成の自殺にも社会的要因があるが、事情はだいぶ違うものだと思う。なぜかと言うと、太宰治の自殺までは、社会はまだ、いろいろ不満な点が多かったが、七十年代以降、平和憲法のもとで、一歩ずつ民主化へと歩むとともに、人民の生活も、世界の経済大国になったくらい豊かになった。社会的歪みが既になくなったとはもちろん言えないが、大きな流れとして、日本は基本的に、ある程度、自国の世界での位置と果たすべき使命が分るようになって、平和を求めるために、世界の人々との心の触れ合いを求めようとしている。それなのに、このような社会に不満を懷き、自殺を敢行したケースは、何と言っても反社会的な行為と言わざるを得ない。三島の場合は、過ぎ去った「大日本帝国」の伝統を追求し、パフォーマンズをやったのけた自殺であつたし、川端の場合、社会の発展、進歩が自分と全然関係ないという現実社会への不満から、美への発掘をする中で仏教的涅槃に憧れる虚無的生死観を懷き、

「功成りて名遂げた」時、涅槃的な自殺を遂げた。この二人とも輪廻転生の夢を見ていたのかもしれない。

さて、社会、国家乃至世界という視角で歴史的に全面的に文人の自殺を見れば、その自殺者には、それぞれ違った生理的原因とか、心理的原因とかがあるにもかかわらず、その共通となる主な原因は、社会的要素となつている。これまでの多くの研究者、特に、精神医学者たちは、自殺者の生理状態や心理状態に拘り過ぎて、自殺者を国内乃至国内の社会環境の中に置くことをあまりせずに、自殺文人の個人的生理的原因を過大視したりして、「神経衰弱」や「狂気」や「非社会的」とかいふ結論を下す傾向がある。文人であるだけに、神経は繊細で、自分の置かれたマクロ・ミクロの社会環境に、並の人の倍ぐらいに敏感であるから、ごく個別のケース以外に、たいていの文人の自殺は、社会的原因と切り離すことが出来ず、社会学的に説明できそうである。

日本の近代までは、心中や武士の切腹が多かったが、近代に入ってから、文人作家の自殺が著しく増える。バッシュレール理論によれば、時代の発展と文明の進歩の標識と言える。現代では自殺する作家がますます少なくなるのは、近代以来の文人・作家たちほど、真剣に社会への使命感に燃え、真剣に人生を思索することをしていないことを物語っていて、これもかなり思索に値するのではないかと思う。

## 八 近代中国における最著名な文人・作家の自殺をめぐる

自殺者氏名	生 年	卒 年	年 齢	自殺手段	生活難	推断されそうな自殺原因
-------	-----	-----	-----	------	-----	-------------

清国留学生 陳天華	一八七五	一九〇五	30	海に身投げ	無	抗議、人々を目覚めさせる
作家・詩人 王以仁	一九〇二	一九二六	24	海に身投げ	有	社会への不満と失恋
国学者 王国維	一八七七	一九二七	49	湖に身投げ	無	旧道徳旧礼教に殉じた
詩人 朱湘	一九〇五	一九三三	34	揚子江に身投げ	有	時代への不満と貧困
文人 陳布雷	一八九〇	一九四八	58	睡眠薬	有	誤った時代に殉じた
作家 老舍	一八九九	一九六六	67	湖に身投げ	無	プロ文革の迫害から人格を守る
評論家 翻訳家 傅雷	一九〇八	一九六六	58	縊死（夫婦）	無	同前
文人 鄧拓	一九一二	一九六六	54	毒薬	無	同前
台湾作家 三毛	一九四三	一九九一	48	縊死	無	夫に死なれて厭世になった

ルポ名作家 徐 遲	一九一四	一九九六	82	ビルから身投げ	無	転換期のアンバランスと婚姻不満足など
--------------	------	------	----	---------	---	--------------------

日本の文人・作家に対して、中国では、「五四運動」までは、前述したように、儒家思想や科挙などの影響で、文人はしばしば役人と重なっていて、個別の不遇な人の自殺（屈原など）以外に、南宋文人謝枋得、崇禎進士陳子龍、明の文人兼役人倪元璐などは、いずれも自己の王朝に殉じて自殺したもので、儒家思想の影響が中国人にとってどれほど強かったかを立証した。辛亥革命で清王朝が倒れたが、革命の成果は軍閥のつとられ、反封建主義、反帝国主義の「五四運動」が起こるまでに、革命先駆者としての陳天華は、海に身投げして封建主義反対の先兵となった。陳天華の自殺は藤村操の自殺よりも、積極的意義がある。それと反対に、倒れた清の廃帝の教師を担当したことから、孔孟の古い倫理道徳に殉じた王国維の自殺は、取るに足らなかった。「五四運動」があつてから、胡適や陳独秀や魯迅などが、封建文学を倒そうとした結果、現代文学としての『狂人日記』などが現れたばかりでなく、儒教思想の束縛から解放されたからこそ、王以仁や朱湘などの自殺があつたのである。したがって、王以仁や朱湘などの自殺は、その軍閥混戦の社会の歪みを訴えるとともに、封建王朝の束縛から解放された社会の進歩をも示した。この点では、透谷や眉山などの自殺と大差がない。とりわけ、貧困に追い詰められて自殺した朱湘の場合、生計に困つて人の厄介になる引越しの前日に自殺した眉山と、なんと似通っていることであらう。ところで、陳布雷の場合、わりと特殊なケースであるが、中国の知識人としての彼は、自分が将来性のない人に仕えて、誤った道に嵌つたと知っていながら、改心しようとせずに、あくまでもその政權に殉じたことも、儒教思想の束縛以外の何物でもない。

一九四九年からプロ文革にかけては、中国の文人・作家の災難に満ちた歲月であつた。連続した政治運動は、「三反」「五反」「鎮圧反革命」運動以外は、殆どその矛先は全部知識人に向けられたものであつた。「反右」の時に自殺した文人作家はまだ夥しいとは言えず、プロ文革中、非業の死に迫られた文人作家は数えきれないのである。老舍、傅雷や鄧拓はそのうちの一番有名な人々にすぎない。しかし、この三人とも儒教思想の影響から、自分の人格を守るために死を以つて迫害に訴えたのである。ここから見て儒教思想は、人間に「気骨」というものを与えることができ、糟粕でない精華部分は馬鹿にされない。大陸と社会制度の違つた台湾作家三毛の自殺は、何と言つても、やはり、仏教の虚無的思想の影響によるものだと言えよう。三毛の自殺はデュルケムの婚姻事情の法則に当て嵌まるものである。あの世に行つてしまった夫の傍に行きたいというのは、社会とそれほど関係がなかつたかのであるが、実際、三毛に不安感を生じさせたものは、社会以外の何物でもなかつた。ルポ老作家徐遲の自殺は、一九九六年に起こつたことであるが、これは、転換期の純文学を頑張つた文人・作家の心理的アンバランスの屈折による。それとともに、現代社会の社会病——老人問題を仄めかしている。この点において、田宮虎彦や江藤淳などの自殺と似通つたところがあるのではないかと思う。

まとめて見れば、日本、中国の文人・作家の自殺には、個別なケース以外に大抵、社会事情がかかわっている。日本の文人・作家の自殺は、同じアジアの中国の作家・文人の自殺とは社会事情の違いで、完全にデュルケム理論で説明しきれない。透谷や操などの自殺には積極的な一面があるが、デュルケムたちは、それを見逃している。一方、三島、川端の自殺は、透谷、操の自殺と同じく反社会的性格を持つているが、透谷、操の自殺は、進歩的思想を代表し、社会の前進を推し進める働きがあるのに対し、三島、川端の自殺は、逆

コースを代表して、社会の後退を願っていたから、消極的な作用と影響が大きい。

## 九 自殺の是非

理屈によれば、人間は世の中に生まれて、自分の生命と肉体を把握する権利がある筈である。しかし、自殺は、倫理上、いったい悪いかどうか、これはかなり複雑な問題である。昔から自殺に対しては、哲学者や宗教家によってさまざまな意見が述べられ、そして、時代や国や民族や信仰などによって 道徳的な評価は、幾多の変化も見られた。カントは

故意に己れの生命を断つことは、まづ其が一般に犯罪であると証明され得る場合にのみ自殺(homicidium dolosum)と名づけられる。この犯罪は或いは吾吾自らの人格に対して行われ、或いは又かく己の生命を断つことによりて他の人格に対して行われる(例えば妊娠している人が自ら死ぬ場合の如く)<sup>83</sup>

と書いて自殺を基本的に否定しているが、また、

祖国を救うために自ら万死の中に突き進むことは自殺であるか?——或いは人類一般の福祉のために身を犠牲に供する決意的殉教は亦之と等しく英雄的行動と看做さるべきか<sup>84</sup>



という疑問を出している。坪内逍遙は、「自殺は二大別あり、殆ど救ふべからざるものと救ひ得べきものと、是れなり」<sup>85</sup>と分類し、「救ひ得べきもの」を「消極的自殺」と「積極的自殺」に分けている。逍遙の結論として、

自殺は絶対に非なるにあらず、利他救世の誠意の存在は多少之れをして是ならしむるなり。但し単に自己の為のみにする消極的自殺は概ね皆非認すべし。その形体苦のためにすると精神苦のためにすると其の有形を対象とすると、無形を対象とすると、動物欲のためにすると悔恨、慚愧、憤怒、嫉妬のためにすると名誉欲、権力欲、究理欲等のためにすると問はざるなり。そのうち業秒不治のために自殺するは人情の上より之れを憫み、罪惡悔恨のためにするは倫理上より見ても幾分か是なりとなす。若し夫れ謂ふ所超倫理の批判に至りては、悉く人類と絶ち悉く人道を離れて事を是非するの標準成り立たざる限りは、殆ど全く意義無きにひとし<sup>86</sup>

というものであった。

筆者は逍遙の観点に基本的に同感している。普通の中国人の目から見れば、自殺は生存意志の貧弱な臆病行為だと言われる。プロ文革中、「畏罪自杀」（罪を畏れて自殺する）「自絶于人民」（自ら人民に絶する）という流行語があったのはつきり覚えている。実際、プロ文革中の自殺者はほとんどが冤罪を蒙って自殺したのである。何年前か、ピストルで自殺した元北京市副市長王宝森氏こそ、文字通りの「畏罪自杀」である。「江東の父老」に面する顔がないと烏江で自決した項羽は、絶対に劉邦を畏れたというわけではない。項羽

は自殺を以つて、自分の名誉と節操を保てたのである。プロ文革中、中国現代の優秀な作家老舍の場合、その投水自殺も絶対に「罪」を畏れるのではなくて、自分の人格を紅衛兵の侮辱から守るためであった。したがって、自殺者にたいして、一概に弱虫だと論ずることは公平を失うことであると思う。

否定論として、臆病や無責任や人生の敗北などであるとか、精神が錯乱したり、権利を剥奪されたり、絶望したり、利己的に過ぎる人間にはもつてこの末路（西洋人）である、とかがある。それに対し、肯定論としては、何かよいものを追求したり、悪いことと抗争したり、それから逃避したり、人々に訴えたり、呼びかけたり、目覚ませたりするように、危険や侮辱から個人の人格と尊厳を守る行為で、勇気のある、男らしくて尊重すべき行為とか、正義、正統とされる事業や人間に殉じる英雄的な行為とか、恥ずかしくて自分の汚名を雪ぐような背徳謝罪や引責謝罪の行為とかがある。

全体から見れば、カトリック教の影響の強い国では、自殺は少ないが、仏・禅の影響の強い国では、自殺はわりと多い。国と民族によつて違う自殺に対しての議論と評価はケースバイケースである。

各種の文化の是非を評論することは難しい。ある要因に迫られて死よりも生の方がもつと苦しく思われる場合とか、または、人間らしく堂々として健康に生活していけないうえ、生存条件を変える力がない場合とか、果てしない苦しみからの解放策として、良心をごまかして辛うじて生きていくより、むしろ清らかで潔く死んでしまうほうがいいという自殺した死者を厳しく非難することは出来ない。それにしても、自殺はあくまでも生命の誤った道であつて、人間の生命は尊いもので、一回しかない。そして、人類の歴史と全ての財産は人間の生命活動の基礎の上に作られてきた。避けることが出来ればやはり自殺しないほうが妥当である。無視できないことには、現代社会では、生を軽んずる傾きは往々にして現代意識の中の人文思想に繋が

っている。人々はますます人間の自己価値、個性、尊厳、独立人格、内省を重んじれば重んじるほど、現在の秩序の抑圧と人間関係の隔たりによる孤独感と苦悶が生じやすい。そこで自殺に救いを求めるのである。これは、社会のよりよい改善と現代科学意識の発展に期待を寄せるとともに、有益な古典を勉強して、現代でますます希薄化していく人間自身の心理素質と精神の修養を高めるほうも肝心ではないかと思う。

## 十 結び

本文の結びとして、次のことを申し上げたい。同じ東アジアにおいても、儒家思想の影響で中国の文人は特殊な政治運動の時期（それでも気骨を守るための自殺は多い）以外に自殺者が少ないのに対し、神道、仏教の影響で日本の文人は自殺者が多い。日本、中国の文人・作家の自殺は本物の精神病によるものが極めて希で、殆どが社会的要因に関わっている。この点について、フランスの社会学者デュルケムが誰よりも先に社会的要因に着眼した『自殺論』の意義の重要性は否定できない。全体的に言えば、日、中の文人・作家の自殺は社会的要因という点で、大抵のケースはデュルケム理論に当てはまるものである。

然るに、デュルケム理論はあくまでも、十九世紀のヨーロッパの国々に向けたものであって、百年来のアジアの日本と中国に全てがびつたりと当て嵌まるわけではないのも理解できそうなことである。宮島喬氏の指摘したとおり、『自殺論』の著者は、自殺の「社会的」要因をいろいろ挙げるに当たって貧困、経済的危機、病苦といった要因を見逃しているのも、日本の川上眉山や牧野信一や中国の朱湘などの自殺は、デュルケム理論で完全に説明できなくなるのである。

なおデュルケムは、自殺する人間の動機を受動的なものとして固定的に捉えているように思われ、自殺者の主観的能動性（社会発展に積極的な自殺及び社会発展に不利な消極的な自殺に分けられると思う）を見逃している。透谷や操や陳天華や老舎などの自殺には積極的一面がある一方、三島や川端や蓮田や王国維など、社会の後退を願ったものであるから、その消極的な作用と影響は無視できない。

プロ文革中、社会の統合力がいままでになく強いのに、夥しい数の文人・作家の自殺者を出したのは、政治運動の迫害によるものである。デュルケム理論では、婚姻状態の悪化は自殺を増やす重要な要素とされているが、プロ文革中、夫婦で一緒に自殺した史学家翦伯贊、文学者傅雷、史学家呉晗、詩人間捷など、いずれも恩愛夫婦であったのに、みな夫婦連れで一緒に自殺した。婚姻の良好状態は自殺者のへ圧力を緩めるのに足りないことを物語っている。だから、デュルケム理論は常態社会にしか当てはまらないが、非常態社会（中国のプロ文革中など）には当てはまらない。それから、明治という専制支配時代の文人・作家の自殺は、低年齢という特徴があるのに対し、六十年代後半に入ってから文人・作家の自殺は、田宮虎彦や江藤淳や徐遲などのように、高年齢化の傾きがある。老人問題という深刻な社会問題を仄めかしている。

# 註

- 1 張朝陽編著『人類自殺史』時代文芸出版社、二〇〇一年、一頁。
- 2 宮島喬『デュルケム自殺論』有斐閣、一九七九年、二頁。
- 3 デュルケム、宮島喬訳『自殺論』中央公論新社、二〇〇三年、一二二頁。
- 4 Shneidman, E. S., *Definition of suicide*, New York, Wiley, 1985, p. 14.
- 5 前注同書、二〇三頁。

- 6 大原健士郎『日本の自殺 孤独と不安の解明』誠信書房、一九六五年、二二頁。
- 7 デュルケーム、宮島喬訳『自殺論』中央公論新社、二〇〇三年、二四七頁。
- 8 前注同書、三三頁。
- 9 Farber, M. L., *Theory of Suicide*, New York: Funk & Wagnalls, 1968, p. 74.
- 10 高橋祥友『自殺の危険 臨床の評価と危機介入』金剛出版、二〇〇一年、一七九頁。
- 11 布施豊正『自殺と文化』新潮選書、一九八五年、一六八頁。
- 12 デュルケーム、宮島喬訳『自殺論』中央公論新社、二〇〇三年、目次。
- 13 宮島喬『デュルケーム自殺論』有斐閣、一九七九年、一三頁。
- 14 厚生労働省『人口動態統計』国民衛生の動向、二〇〇〇年。
- 15 デュルケーム、宮島喬訳『自殺論』中央公論新社、二〇〇三年、一九〇頁。
- 16 近代作家研究事典刊行会編『近代作家研究事典』桜楓社、一九八五年。
- 17 総務庁統計局監修、日本統計協会編・発行、一九八七年度『日本長期統計総覧』に載せた八四年の自殺率データを平均したもの、二四二頁、二四七頁。
- 18 張朝陽編著『人類自殺史』時代文芸出版社、二〇〇一年、三〇〇、三〇一頁。
- 19 前注同書、二二頁。
- 20 宮島喬『デュルケーム自殺論』有斐閣、一九七九年、二〇四頁。
- 21 インタネットのHP作者相田くひをが作った『日本自殺史』を参考にして、まとめた統計(省略有り)。
- 22 陳天華(一八七五―一九〇五)、湖南省新化の生まれ、本名は顕宿、字は星台、号は思黃である。日本留学中、彼は同胞を目覚めさせるために、東海に身を投げて自殺した。

23 王以仁（一九〇二―一九二六）、字は欽孟、号は盟鷗。天才の詩人と文人。安徽天台の人。二三歳の若さで失恋の原因も加わって、海に身投げ、自殺した。長詩『靈魂の哀歌』などがある。

24 王国維（一八七七―一九二七）、中国の清末民初の国学者。字は静安、号は觀堂。浙江寧海の人。羅振玉の東文学社で藤田豊八に学び、清末に西洋美学により、中国古典を再評価。辛亥革命の際、師の羅振玉と京都に亡命。帰国後、哲学、文学から歴史学、考古学に先駆的な業績を残した。北伐軍が南京・上海を攻略して北上し続けた時、彼は頤和園の昆明湖に身投げ自殺した。

25 朱湘（一九〇五―一九三三）、詩人、作家。字は子沅、本籍は安徽、湖南沅陵の生まれ。父親は、湘西沅陵で、道台を任官したことがある。詩人、代表作は『草莽集』『採蓮曲』、『この江は半ば涸れているにもかかわらず、やはり汨羅という』などがある。一九三三年、生計に追われて、上海から汽船に乗って南京へ向かう途中、李白の身投げした采石というところを通りすぎたとき、揚子江に身投げした。

26 陳布雷（一八九〇―一九四八）、蒋介石の侍従室主任の職にあり、蒋介石の「文胆」と言われていた。一九四八年十一月十三日、南京で自殺した。

27 傅雷（一九〇八―一九六六）、江蘇省南江県（現在の上海市に属する）の人。文学翻訳家、文芸評論家、フランス文学翻訳の権威者。プロ文革中、迫害を受けて自殺。

28 孔厥（一九一六―一九六六）、作家。江蘇呉県の人。袁静と共著の『新兒女英雄伝』などの長編小説がある。プロ文革中、迫害を受けて自殺。

29 老舍（一八九九―一九六六）、本名は舒慶春、字は舍予、満州族、北京の生まれ。中国の「人民芸術家」、初めて市民を描いた作家で、『駱駝祥子』『茶館』などは世界的にも有名である。プロ文革中、迫害を受けて湖に身投げして自殺した。

30 鄧拓（一九一二―一九六六）、本名は鄧子健、鄧雲特、ペンネームは、馬南邨。作家、ジャーナリスト、史学者、政論家。福建省福州出身。一八歳から、『左聯』加盟、共産党入党。一九三七年、『晋察冀日報』社長。一九五〇年、『人民日報』社長・編集長、後、北京市委宣伝部長。プロ文革中、文字獄の最初の被害者、迫害を受けて毒藥を飲み自殺した。

31 羅広斌（一九二四―一九六七）、作家。四川成都の人。国民党政権の重慶中米合作所の僅かに生き残った人の一人。『在烈火中永生』『紅岩』の創作者の一人。プロ文革中、迫害を受けて自殺。

32 周瘦鵬（一八九四―一九六八）、作家、翻訳家、園芸家。江蘇呉県の人。主な著作は『花影』などがある。プロ文革中、迫害を受けて自殺。

33 楊朔（一九一三―一九六八）、作家、散文家。山東蓬萊の人。主な作品は『三千里江山』『楊朔散文選』など。訪日した時、書いた散文『桜花雨』も有名。プロ文革中、迫害を受けて自殺。

34 呉晗（一九〇九―一九六九）、著名な史学者、もと北京大学学長。プロ文革中真っ先に迫害を受けて、鄧拓、廖沫沙と一緒に『三家村』として批判され、後で更なる迫害を受けて夫婦連れで自殺した。

35 田漢（一八九八―一九六八）、脚本家。湖南長沙の人。中国国歌『義勇軍行進曲』の歌詞の作者。元中国劇家協会主席。プロ文革中、迫害を受けて自殺。

36 海黙（一九二三―一九六八）、実名は張海黙、脚本作家。山東黄県の人。主な作品は『母親』『洞簫横吹』『山の奥の菊花』などがある。プロ文革前から批判されたことがあり、プロ文革中、迫害を受けて自殺。

37 馮志（一九二三―一九六八）、作家。河北省静海の人。著作は、長編小説『敵後武工隊』など。プロ文革中、迫害を受けて自殺。

38 聞捷（一九二三―一九七一）、当代詩人。実名は趙文節、巫之祿。江蘇丹徒の人。袁鷹と共著の詩集『花環』、

散文集『非洲的火炬』と『聞捷詩選』などがある。プロ文筆中、迫害を受けて夫妻で自殺した。

39 三毛（一九四三～一九九一）、本名は陳平、台湾の当代における著名な作家である。生涯に二三点の作品を出版し、合わせて五百万字を超えている。その作品は十五カ国の文字に翻訳され、彼女の本は、中国大陸で、四百万冊余り発行された。夫ホーシが船の事故で死亡後、幼年時代の教師からの虐待による不安感が募って、仏教の輪廻転生の觀念の影響で縊死した。

40 徐遲（一九一四～一九九六）、本名は徐商寿、浙江興の人。有名なルポ作家。全国に大きな影響を与えた数学者陳景潤の事跡を記録した有名なルポ『グッド・バツハ仮説』の作者。晩年、二回目の婚姻の失敗や転換期の重商輕文などによる心理的アンバランスなどで、ビルから身投げして自殺した。

41 この表は、陳賢慶編『文革死亡檔案』と「一九四九年～一九七六年間中国知識分子自殺狀況の初步考察」『謝泳自選集 教育在清華』に基づいて纏めたものである。

42 史記・司馬禎補三皇本紀：「当其（女媧）末年也、諸侯有共工氏、任智刑以強霸而不王、以水乘木、乃与祝融戰、不勝而怒、乃頭触不周山崩、天柱折、地維缺」。（女媧の末年、諸侯に共工氏というものがいて、知謀に優れ、よく刑罰を用いたので強大になり、覇者となったが、王者にはなれなかった。そこでみずから水徳だといいい、木徳の女媧氏の天下を奪おうと、洪水をおこして木をおし流そうとした。しかし祝融と戦って敗れ、怒って頭を不周山にぶつけ、崩してしまった。）

43 屈原（前三四三頃～二七七頃）詩人、中国戦国時代楚の人。王族に生まれ王の側近として活躍したが、妬まれて失脚、ついに汨羅に投身自殺。著作は自伝的叙事詩『離騷』などある。

44 張朝陽編著『人類自殺史』時代文芸出版社、二〇〇一年、二二頁。

45 謝枋得（一二二六～一二八九）、南宋末の人。新王朝の元朝に仕えるのを拒んで食を断ち死んだ。字は君直。



号は疊山。諡は文節。信州弋陽の人。文学者。南宋末に乱を逃れて福建の建寧の山中に隠れ住んでいたところ、新王朝の元に出仕を求められる。しかし、謝枋得はこれを峻拒した故、大都（現北京）に送られた。やがて、その地で食を断つて死んだ。著名な著作は、『文章軌範』七卷などがある。

46 陳子龍（一六〇八―一六四七）、字は卧子、上海松江県の人、崇禎進士、中国明末の重要な作家。紹興推官と兵科給事中を歴任。清兵が南京を攻略してから、彼は抗清活動を組織し、敗れて捕まり、投水自殺した。

47 倪元璐（一五九三―一六四四）、字は玉汝、号は鴻宝、園客、明上虞の人。あと会稽に転居。一七歳で挙人。二九歳で進士になる。兵部右侍郎兼侍読学士、戸部尚書兼翰林院学士歴任。北京が李自成に落とされてから縊死。詩文、山水画、書道に長じる。

48 陳舜臣『中国近代の群像』朝日新聞社、一九八〇年、二九七頁。

49 王文生「王国維」『中国歴代著名文学家評伝』山東教育出版社、一九八三年、三八六頁。

50 『孝経』孔子の弟子曾参の門人が記したもの。

51 「儒有可親而不可劫也、可近而不可迫也、可殺而不可辱也」、『礼記・儒行篇』。

52 グリゴリー・チハルチシヴィリ著、越野剛等訳『自殺の文学史』作品社、二〇〇一年、一九四頁。

53 「象徴の烏賊」『生田春月全集詩集』第一巻、飯塚書房、一九八一年、四一〇頁。

54 望月百合子「解放の詩人春月」『近代作家追悼文集成』一二巻、ゆまに書房、一九九二年、二二〇頁。

55 「芥川龍之介について」『三島由紀夫全集』第二六巻、新潮社、一九八〇年、五一二頁。

56 「末期の眼」『川端康成全集』第二七巻、新潮社、一九八二年、二〇頁。

57 『朝日新聞』夕刊、二〇〇三年十一月二二日。

58 浅原六朗「喧嘩牧野」『近代作家追悼文集成・牧野信一 中原中也 岡本綺堂』二六、ゆまに書房、二〇〇

二年、七五頁。

59 前注同書、四八頁。

60 奥野健男『太宰治論』春秋社、一九六六年、二四九頁。

61 前注同書、一〇七頁。

62 阮籍「阮步兵咏懷詩」第三三。

63 王中田「中日倫理文化之比較研究」『日本文化研究』中国社会科学出版社、三三頁。

64 伊藤博之等編「浄土思想と文学」『仏教文学講座』第二卷、勉誠社、一九九五年、四三頁。

65 新渡戸稲造著、岬龍一郎訳『武士道』PHP出版、二〇〇四年、二五頁、二八頁。

66 前注同書、八五頁。

67 小田切秀雄編「楚囚の詩」『北村透谷集』筑摩書房、一九七六年、一〇頁。

68 太宰治「苦惱の年鑑」『太宰治全集』八、筑摩書房、一九七二年、二一〇頁。

69 大原健士郎「心中考」太陽出版、一九八七年、七四頁。

70 中西進「古代社会と自殺」『国文学 解釈と鑑賞』作家と自殺 十二月臨時増刊号、至文堂、一九七一年、

五二～五七頁。

71 村井康彦「中世社会と自殺」、前注同書、六〇頁。

72 前注同書 同文、六四頁。

73 宮島喬『デュルケム自殺論』、有斐閣、一九七九年、一二二頁。

74 「心中」『周作人全集』第一卷、藍灯文化事業股份有限公司、一九八一年、一六五頁。

75 宮島喬『デュルケム自殺論』有斐閣、一九七九年、一二二頁。

- 76 河竹登志夫「近世社会と自殺」『国文学 解釈と鑑賞』臨時増刊号、一九九一年、七三頁。
- 77 真下三郎等監修『新編日本文学史』改訂三十八版第一学習社、一九九八年、九頁。
- 78 前注同書、三一頁。
- 79 前注同書、六二頁。
- 80 前注同書、九七頁。
- 81 「哀愁」、『川端康成全集』第二七卷、新潮社、昭和五七年、三八八頁。
- 82 李沢厚『中国古代思想史論』安徽文芸出版社、一九九四年、三〇六、三〇七頁。
- 83 白井成允訳「自ら生命を断つことについて」『イマヌエル・カント道德哲学 カント著作集』八、岩波書店、一九二六年、九七頁。
- 84 前注同書、一〇〇頁。
- 85 「自殺の分類及び其の是非」『逍遙選集』第六卷、春陽堂、一九二六年、五六〇頁。
- 86 前注同書、五八七頁。

## 発表を終えて

日文研で日本研究に専念できる貴重なチャンスに恵まれたう  
え、教授の方々や各国からの研究員たちはいいお手本を示してく  
だしました。研究者の皆さんの外見上は穏やかに見えても、蔭  
では日々懸命に努力を重ねる向上精神に触発されて、私もどうに  
か目標に向かって邁進しています。少しでも成果があるとすれば、  
それは全く皆様のお励ましの賜物です。センターで感受しえたこ  
の精神は、私の生涯の宝物として大切にしたいものです。

このたび、光栄にも国際交流基金のフォーラムで、発表の機会  
を与えていただいたことも、私にとっては大変な励ましとなり、  
人生の貴重な体験として記憶に残るものとなりました。

ここに、貴重な時間を割いて拙論のご指導をしてくださった鈴  
木貞美先生、いろいろ暖かいご配慮をいただいた山折所長をはじ  
め、安田喜憲、稲賀繁美、川勝平太ほかの諸先生に、厚く敬意と  
感謝の意を表します。行き届いたお世話を戴いた奥野さん、佐々  
木さん、フォーラムでご協力くださった研究協力課の木下課長を  
はじめ職員の皆様に厚くお礼を申し上げます。

山折 伸



日文研フォーラム開催一覧

回	年 月 日	発 表 者・テ ー マ
⑩①	9.11.11	<p>KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授)</p> <p>Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授)</p> <p>Kinya TSURUTA 鶴田 欣也 (プリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」</p>
⑩②	9.12. 9	<p>Jonah SALZ (龍谷大学助教授)</p> <p>「猿から尼まで—狂言役者の修業」</p>
103	10. 1.13 (1998)	<p>KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授)</p> <p>「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」</p>
⑩④	10. 2.10 (1998)	<p>GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」</p>
105	10. 3. 3	<p>シュテファン カ イ ザ ー Stefan KAISER (筑波大学教授)</p> <p>「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」</p>
106	10. 4. 7	<p>ス ミ エ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「幽霊と妖怪の江戸文学」</p>
107	10. 5.19	<p>Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」</p>
⑩⑧	10. 6. 9	<p>Hiroshi SUMIZAKI 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「化粧の文化地理」</p>

⑩9	10. 7.14	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ莊子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪1	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪2	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシユ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪4	11. 1.12 (1999)	D U Q i n 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑪6	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪7	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑪8	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」

119	11. 6. 8	<p>マ リ ア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」</p>
(120)	11. 7.13	<p>R E E C E Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」</p>
(121)	11. 9. 7	<p>SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」</p>
(122)	11.10.12	<p>ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」</p>
(123)	11.11.16	<p>ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」</p>
(124)	11.12.14	<p>X. Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」</p>
(125)	12. 1.11 (2000)	<p>エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」</p>
(126)	12. 2. 8	<p>LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」</p>
127	12. 3.14	<p>アンナ・マリア・トレーンハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」</p>
(128)	12. 4.11	<p>ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユフスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」</p>



⑫⑨	12. 5. 9	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
⑬⑩	12. 6.13	ケ ネ ス L. リ チャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑬⑪	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
⑬⑫	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
⑬⑬	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
⑬⑭	13. 4.10	L I Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑬⑮	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭⑩	13. 6.12	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑭⑪	13. 9.18	ジョナサン M. オーガスティン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサキムラステイブン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑭⑫	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」
⑭⑬	14. 2.12 (2002)	マシミリアーノ ト マシ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 恵卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マッシュュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」

150	14. 5.14	LEE Kwang Joon 李 光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」
⑮	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボ ロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
153	14. 9.10	YEE Miliim 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス リュ ッ タ ー マン Markus RÜTTERMAN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑮	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バ ー ンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」
157	15. 1.14 (2003)	デビッド L. ハ ウ エ ル David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊仇討ち一件顛末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦 暁梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	リチャード H. オ カ ダ Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉？：言語と国民国家」

⑩	15. 4. 8	ビル ス ウェル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	Park JeonYull 朴 鎰烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	林 容澤 RHEM YongTack (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボイカ エリト ツイゴバ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダニエルズ Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
⑪	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
⑫	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亚太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響—家族改革をめぐって—」
167	15.12. 9 (2003)	エフゲニー S. バクシエフ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神とが出会う場所 沖縄県宮古諸島の聖地・場所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔 周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
⑬	15. 5.11 (2004)	コンスタンティン ノミコス ヴァポリス Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」

⑦	15. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王 述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
171	15. 7.13 (2004)	ヴィクター ヴィクトロヴィッチ リ ビ ン Victor Victorovich RYBIN (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」
172	15. 9.14 (2004)	スコット ノ ー ス Scott NORTH (大阪大学大学院人間科学研究科 助教授) 「セールスマンの死 : サービス残業・湾岸戦争・過労死」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>

\*\*\*\*\*

発行日 2004年10月15日  
編集発行 国際日本文化研究センター  
京都市西京区御陵大枝山町3-2  
電話 (075) 335-2048  
ホームページ：<http://www.nichibun.ac.jp>

\*\*\*\*\*

© 2004 国際日本文化研究センター







■ 日時

2004年 6 月 8 日（火）

午後 2 時～ 4 時

■ 会場

アーバネックス御池ビル東館

